
THE MOON IN A FURY.

ハインケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE MOON IN A FURY .

【Nコード】

N3369U

【作者名】

ハインケル

【あらすじ】

西暦20XX年。新たな国家資格『武装探偵』が認可された近未来の日本。

東京の外れにある行きつけの射場で日課となっている射撃練習に励んでいた停職中のリムジンドライバー兼賞金稼ぎ、相模東のもとに一人の男が訪ねてきた。目的は“何でも屋”、賞金稼ぎの依頼だった。

依頼内容も詳しく聞かずに引き受けてしまった東は、依頼の詳細を読み、驚愕する。

その依頼とは、かつて在籍していた『東京武偵高校』に忍び込み、ある事件に関わった武偵全員を生死問わず拘束せよとのものだった――。

『東京武偵高校』ほか『緋弾のアリア』の舞台や世界だけを拝借した別物になる可能性があります

一部、『ベン・トー』的要素を含んだ番外編があります。

S V O N 1 1 1 (前書き)

さて、これから始めようと思うのは、今からそう遠くない未来。
未だ年号は平成から変わらず、リーマン・ショックも件の大地震も
原発事故も発生しなかった世界の話だ。

その日もまた雨であった。首都東京から少し離れた場所に位置する射場に、一台の黒い、三菱・ランサーが停車した。エンジン音の収まった後、車から無精髭を生やし、ヨレた灰色のスーツを着たどこか胡散臭い香りのする中年男が降り立ち、雨に濡れぬよう、すぐさま手近の傘を差した。

車にキーを掛け、射場の中へと向かう。しとしとと降りしきる雨のせいか屋根付きの射場といえども、人気はまったくといっていいほどなく、ガラガラだった。

男が踵を返しかけたところ、突然、凄味の利いた銃声が射場を震わせ始めた。それも、一発ではない。何発も連続して発射しているのだ。

二発、三発と数え終えたところで男は轟音の根源へと足を向かわせた。その間にも射撃は続いている。

しばらく射場を横に進んで行くと、この雨の中で一人黙々と撃ち続けている希有な射撃手の姿が見えた。しかも、女だ。

外観からすれば年齢は二十歳前後のようだが、セーラー服やブレザーを着れば未だ女子高生と言っても大丈夫だろう。長い黒髪は白紐で器用にポニーテールに結わえており、服装はジーンズに黒のシヤツという簡素な組み合わせ。加えて、その上にオリーブ・ドラブのジャケットを羽織っている。耳には鼓膜の防護のためか、ヘッドフォンタイプのイヤーマフを装着していた

そんな彼女がランダムに飛び出すクレー目掛けて撃ち続けているのはイタリアのフランキ社製のコンバーティブル・ショットガン、スパス12だった。

しかし、どうも仕様がオリジナルとは違うようで、ストックは通常の散弾銃のような外観のスポーターストック、リアサイトはゴーストリングではなく、フル・アジャスタブル可能なオープン・サイ

トへと改造済みらしかった。

快調なセミオートでの回転を見せ、全弾撃ち切った女は銃を射台に置くと、男のすぐ側に置かれたベンチへと腰掛けて四肢を投げ出して、一つため息をつく。

「先に言つとくが、当分リムジン・ドライバーは無理だ??? 停職中の身なんでね」

どこか疑うような冷たい視線を、女はその怪しげな男へと送った。が、男は特に気にする様子もなく、女の身体を這うような視線で観察している。

ふむ、と言葉を漏らし、軽く頭を下げ、男は言った。

「いや、君個人に依頼があるんだ。とりあえず、先払いとしてこいつを渡させてもらう」

と、男が懐から一万円札を輪ゴムで束ねたものを取り出し、女の膝へと置いた。軽く、五十万は下らなように思われる。

「こいつはアレか。依頼を受けなくても、渡してもらえるのか」

間髪入れずに「ああ」と頷いた後、男は煙草をくわえ、火を点ける。

「報酬は？」

「最低でも君の月給五ヶ月分程度、だ。期間は標的すべての排除、および拘束が済むまで。五ヶ月を超えた場合、一月经つごとに君が今現在支払われているであろう基本給の二倍を加算する。ただし、成功すればだが」

女はしばし無言のままだった。が、その沈黙を突き破るように「オーケー」

「いいだろう。ところで、一応書類もあるんだろうな? なかったら受けられんぞ」

すると、男はスツと懐から小型のUSBメモリを差し出した。男の吐き出した紫煙は消えることなく辺りを漂っている。

「口頭で話すと情報が漏洩しそうでね……詳細はそこの中に書いてある。報告は後日そっちを訊ねるからそのつもりで??? じゃあ、頼ん

だ」

それだけ言うのと依頼主は火の点いた煙草をくわえたまま、ヒラヒラと手を振りながら去って行った。

一人残された女はUSBメモリを左手でもてあそびながら、再びため息をつく。

「こんなとこまでデジタルか？六、七年前まではまだVHSと一眼レフ主流だったくせに……まったく、時間の流れつつうのは……」

その後、続けてため息が自然と口からこぼれた。

明くる日、自宅のベッドで眠っていた女はけたたましく鳴り響く目覚まし時計を壁へ投げつけた後、ようやく身体を起こした。ここ最近でいったい何台もの目覚まし時計を破壊してきたのかは想像もつかない。いや、むしろしたくないのが女の本音である。

さがみあずま
相模東。外観年齢20前後。ライトスタッフ・エージェンシーな

る民間警備会社に勤務するエージェント兼リムジン・ドライバー。

現在はわけあって停職中。

ベッドから跳ね起きた長い黒髪の女、東はその足で洗面所へと向かうと蛇口を捻り、冷たい水で顔を洗った。その後、朝食の支度を済まし、それにありつく。とは言っても、茶碗に炊飯器で炊いた白飯を盛りつけ、味付け海苔を副食にして胃に放り込む質素なものではあるが。

先に停職中と書いたが、さらに正確に言えば“自宅謹慎”に当たっている。理由は実にシンプルかつ明瞭なものだ。リムジンに乗せた客の一人が文句しか言わず、東は思わずカツとなって殴ってしまった結果、後日課長に呼び出され、怒鳴られるとともに自宅謹慎を命ぜられた？。

そして、その矢先にあの依頼人である。元より、賞金稼ぎもしているのだから依頼する相手は間違いではないが。

日本もまた、米国と同じように 賞金稼ぎ制度を近年採用した。裁判所命令が出ている犯罪者を捕まえれば報酬が出る、そういった仕事の内容である。

が、こういった仕事をしていると時折、脱獄の手伝いを、とかそういった何ともダーティな依頼も舞い込んでくる。何でも屋と勘違いしている節もあるのかもしれないが、しかし、時としてそういった仕事にもありつかないと飯が食えないのも現実だ。

話を戻し、賞金稼ぎになるには厳粛な審査と試験をパスしなければならぬ。が、事実上現職や退職した警察官、あるいはそういった技術のある者ならば八割方合格できる。そして、許可証が下りたその日から鉄砲の所持も認可される。

銃刀法も少々変更された。賞金稼ぎに関係する事柄としては『最高裁からの賞金稼ぎの認可を受けた者はライフル類、または散弾銃等の弾倉には銃刀法に規定された弾数以上の実包を装填してもよい。また、拳銃の携帯および所持も違法とされない』。

ただし、そういった鉄砲類はすべて自腹になる。しかし、有り難いことに近年、ある職業とそれを養成する学校が東京湾内にある人工島に設立されたため、鉄砲類の関税が下がっており、非常に購入しやすい価格となった。例を上げれば、米国では362ドルするスタームルガー社製の・22口径プリンキング・オート、Mk・IIイスタンダードモデルが約3万円の購買価格となっている。これには言うまでもなく、円高も大きく関係している。

食事を済まし、身支度を整えた東は手元にある銃器“すべて”が保管されているコレクション・ルームに入った。中は多数のガンロツカーが所狭しと設置され、その一角には作業用のデスクとデスクスタンドが置かれている。

内一つのガンロツカーの中から取り出したのは、6インチ銃身のデイヴィス・スモルト——その高精度さで今なお伝説として語り継がれるコルト・パイソンのバレルと確実なアクションに定評のある

S & a m p ; W ・ M 1 9 の フ レームを組み合わせた理想的な六連発リボルバーである。口径はM19そのままの . 3 5 7 マグナム。

グリップには東の好みでバックマイヤーのSKL・クラシックスタイプ??? 俗に言うオーバーサイズ・ラバーグリップを装着し、加えてフロントサイトにはレッドインサートが入れられ、視認性が向上している。リアサイトはオリジナルのままのフル・アジャスタブルだが、日本国内で生産されているエアガンやモデルガンなどの模造銃とは違い、しっかりとホワイトラインが入れている。

そのスモルト6インチををシャークスキンのショルダーホルスターへと納め、ベストのように袖を通す。射場通いはかれこれ三年ほど続けており、もはや毎日の日課だ

普段ならばその上に愛用のM65・フィールドジャケット2ndモデルのレプリカを羽織り、愛車のフェアレディ・Zをカッ飛ばして射場へ急ぐところだが、ふと昨日依頼主から受け取った資料に目を通していないことを思い出し、来た道を引き返して自室へと戻った。渡されたUSBメモリはPCの置かれたデスクの上で放りっぱなしになっていた。

すぐさまiBookの電源を入れ、椅子に腰掛ける。ブーン、という独特の起動音の後、しばらくしてすぐさま青いデスクトップ画面へと変わった。

そこでUSBを端子に差し込み、中身を確認める。入っていたのは言わずもがな『Microsoft・Word』で編集された依頼内容の詳細資料だった。

軽く読み流し始めたところ、ある一文で東は思わず言葉を失った。そこに書かれていた一文は『東京武偵高校』。

レインボーブリッジ南方に存在する人工島内にて運営されている武装探偵養成のための特殊高等学校である。

S V O N 1 1 1 (後書き)

更新は不定期になります。サ一センorz

『東京武偵高校』——そのワードに動揺を覚えたものの、今は依頼を確認するのが先決である、と思い返し、東はその文章フォルダを読み進めることにした。

依頼の概説は以下の通りになる。

——先日、新宿で発生した無差別発砲事件において、多数の死傷者を出したのは周知の通りである。

が、その銃はどこから流れたものなのか。それに関してはどのメディアも一切触れていない。

少なくとも、ヤクザでないことは確かだ。なぜなら、ヤクザが何丁ものB & a m p ; T ・ M P 9を用意できるはずがない。せいぜい出来てトカレフ、マカロフ、サタデーナイト・スペシャル、タウリスのリボルバー、安い割に品質のいいトルコ製拳銃程度だろう。短機関銃、それも公的機関のみに販売が限定されている最新式の短機関銃などそうそう調達できるものではない。

しかし、大切なのはここからだ。つい先日、独自の捜査で掴んだ情報によると、そのマシンピストルを流したのは驚くなかれ、東京武偵高校の生徒だというのだ。

無論、その噂は事件で被害を受けた親族が寄り集まってできたN P O 団体の耳にも入ってくる。団体のメンバーは血眼になって犯人を捜した。そして、犯人らの目星も付いたらしいが、いかんせん数が多く、現在絞り込みの途中だという。目星を付けるだけでも困難な作業を終わらせているのだから、おそらくハッカーか警察関係の人間が関わっているような予感がした。

今更になつて言うまでもないが、その団体こそが今回の仕事における東の雇い主だ。U S Bを渡した男もその団体に所属しているらしい。

犯人の使用した銃器を流したのは武偵——それが本当かデマかはさておき、依頼主はそれを『真実』と見た上で依頼してきたのは明らかだ。しかし、国家資格であり、ある種公務員に近い存在である武偵を挙げようとしても、それは民間の一非営利団体にとってはまず不可能なことだ。たとえ、団体の中に警察関係で上層部に所属する国家公務員と太いパイプを持っていたとしても、だ。

さらに、仮に犯人グループを逮捕できたとしても、東京武偵高校は事実の隠蔽にかかり、真実は闇に葬り去られる。そもそも、引き渡せと言ったところでそれに応じるかどうかすら不明である??。

その辺りも踏まえてオレを選んできたか。東は小さく舌打ちした。東を東京武偵高校の生徒として仕立て上げ、潜入させ、犯人を極秘に拘束する。もとい、犯人らの抹殺——そう考えると、先に渡された百万は武偵校に入り込むために必要な経費、ということなのだろうか。身分証明書の偽造も必要になってくる。

何にせよ、星の数ほどいる賞金稼ぎの中で——そもそも、そういった仕事ならば武偵のほうがいいかもしれない——東を選択してきたのは理由としては二つ。外見と実年齢、それに経歴だろう。

紛れ込ませるうえで年齢は特に重要である。二十歳前後ならば、まだなんとかなる。少なくとも、ブレザー等を着用してまだそれに見えれば大丈夫だ。

先に経歴と書いたが、これは東がかつて東京武偵高校に在籍しており、二年の半ばで辞めたことに由来する。そのことを依頼主らがどこから聞いたかは知らない。が、少しでも内部事情を知る者を選んだのは正しい選択には違いない。

退学した女がかつての在籍していた学び舎に仕事のために戻ってくる……言葉で語るならある意味で感動的ではあるが、内容が内容であるため、感動は微塵も覚えない。

要するに、銃を密売した者たちを殺せ、と言っている。殺して東京湾の深淵でコンクリ樽にでも詰めてゆっくり朽ちらせる。おそらくはそういうことなのだろう。あるいは、マスターズ レザード 教務課や諜報科に悟られ

ないよう、目標を拘束して依頼主に身柄を引き渡すか。

もう汚れ仕事は慣れきった。いや、自分からそれに向かっていったのかもしれない。東にとって大切なのは標的を挙げたときの歓びよりも、相手との銃撃戦や格闘における生命の駆け引きこそが重要なのであり、その次に金、歓喜はさらにそのまた次になる。

その後、荷物をまとめた東は車を走らせ、行きつけの射場へと向かった。射撃用レンジに立ち、射台の側にある卓の上に持ち込んだ銃器や弾薬をざつくばらんに並べる。今日持ち込んだのはデイヴィス・スモルト6インチにS & amp; W・M27、それとミロク・リバティチーフ、CZ40B、カスタムされた戦前型のコルト・ナショナルマッチなどと様々だ。これらはすべて自腹ではあるものの、時としてダーティな仕事に携わって食ってきた見返りとも言える。真つ当な人間がこれらすべてを手にしようと思えば、サラ金で金を下ろしてくる他はない。

また、操作性や性能を向上させる社外品部品が出ていないような珍しい銃器以外にはすべてカスタム・パーツを取り付け、使い勝手のいいように改造している。前述した収集物の内、CZ40B以外は最低でもグリップ程度の交換は済ませている。

東は拳銃に関して特にそれといったこだわりもなく、半自動式だろうが回転式、どちらも扱える。むしろ、機関拳銃でもいいぐらいだが、通常の射場ではフルオート射撃を行ってはならないし、一般市民の所持は禁止されている。『賞金稼ぎは警察ほかロウ・エンフォースメントではなく、また、特別な権限を有する国家公務員ではない。あくまでも民間の特殊職業であるため、一般市民に該する』とされているから賞金稼ぎもまた所持は不可能なのだ。しかし、違法だからといって所持していないわけではなく、東もまた、マシンピストルに分類されるような小型の短機関銃??MAC・M10やM11を所有し、タンペレーン・ヤティマティックのような変わり

ものさえもが住居のガンロッカーで保管されているぐらいである。

ちなみに、武偵は特別に認可されているらしく、それが証拠に数年前、テレビで流れた東京武偵校の射撃訓練の映像で件の防弾制服を着た女子生徒がダブルハンドでストックを外したマイクロUZIを指切りバースト射撃でバラ撒いているのを見た。隣にいた教官が「9ミリ反動ぐらいで手をブレさすな！ 全然当たってないじゃないか！」と憤慨していたが、あれには思わず失笑すると同時に、「かの武偵校の教官殿はいつたい何を教えていらっしやるのやら」と大いに首を捻ったものだ。

現実的に考えて短機関銃の簡略化された照準器を用いての精密な射撃を求めるのは酷なことで、ストックのないものなら尚更である。そもそも、“幼女体型な彼女”に9ミリパラベラムを撃たせようと考える時点で間違っているし、逆にブレても仕方がない。

オレがあの子に持たせるなら、と東は一人つぶやく。反動も比較的緩やかなショート・リコイル式のワルサー・PK380か、中型拳銃としてはお馴染みとなったSIG・P230系列、あるいはワルサー・PPシリーズ——いや、レミントン・M51も抜かせないあの握りやすいグリップフレームは一種魅力的であるし、安全装置もマニュアル、グリップ、マガジン・セフティの三つを搭載しており、安全性も高い。ただ、すでに生産が中止されているため、手に入れるにはガンショーにでも行つて状態のいい中古を探してくるしかないだろう。

後にも先にもCZ社唯一のフルサイズ・アルミアロイ・フレームオートとして知られる、CZ40Bの遊底が発射と同時に後退して黄金色の真鍮薬莖を吐き出す。途端、遊底は後退したまま薬室を閉鎖しようとしな。弾倉に入った実包すべてを撃ち切ったのだ。

こうなれば引き金をいくら引こうが無駄なことだ。再び射撃を再開するためにはクロス・ボルトタイプのマガジン・キャッチボタンを押して弾倉を引き抜いてスライドを引く、あるいはスライドストップ・レバーを操作してスライドを前進させ、チャンバーを閉鎖し

てやる他はない。また、閉鎖させる前に次の弾倉を入れておけばスライドが前進すると同時に初弾が薬室に装填され、続けての射撃が可能になる。

しかし、東はホルルド・オープンしたCZ40Bに新たなマガジンを装填することなく射台に置き、ヘッドフォンタイプのイヤーマフを外した。そのままベンチに腰掛け、溜まった息を吐き出し、左肩を握り拳で軽く叩く。

「問題は??」

問題は、現場を検証する者たちの真つ只中で仕事をせざるを得ないことだろう。何しろ、東京武偵校には面倒なことに現場検証のプロフェッショナルを養成するための鑑識科^{レミア}なる学科が存在するのだ。それは、警察署のド真ん中で殺人事件を起こすのと似ている。殺害に成功する確率はゼロではないものの、計画実行後に逃亡できる確率は限りなくゼロに近い。

東は懷に収まっていたチューブ型の白い携帯用シガー・ケースから中身のダビドフ・エクスクイジトスを取り出すと、シガーパンチを葉巻の一端に押し込み、丸く小さい吸い口を開ける。紙巻たばこにはない、一連の通過儀礼を済ませた後、ようやく口にくわえ、有り触れた白銀色のオイルライターで火を点けた。中に入っているオイルはジッポー社純正のものではなく、百円均一の店で買ってきた安物だ。紛い物ゆえに火付は悪いが、その代わりとしてオイル臭がほとんどなく、葉巻でも気楽に火を点けることができるため、愛用している。

ゆっくりと紫煙を吐き出すと、それは自らの身をくゆらせながら辺りを漂う。ニコチンが口の粘膜から徐々に吸収され、徐々にだが気分が落ち着いてきた。

さて、とベンチから立ち上がった東は左手でロングファイラーのハンドメイド・シガーを片手に持ち込んだ銃火器を散らかしたままの卓へと近づいた。

「今度はコルト辺りでも撃つとするか。まだ、向こうで何使うかも

決まっ てないしな？？」

そう言っ て灰皿の上へ葉巻を置き、コルト・プリウォーナシヨナルマツチカスタムの銃把へウィルソンの八連発弾倉を差し込み、遊底を引いた。

「市木美帆^{いちきみほ}。よろしく」

前傾45度の敬礼とともに、いささかぶつきらばうな自己紹介を終えると、辺りから義務的な拍手がパチパチと聞こえてくる。

「じゃあ、市木さんは——」

担任らしい気弱そうな教師が指定したのは彼女から見て右端の最後尾——窓際の席だった。軽く会釈を返した彼女は指示された席へ腰を下ろす。

それを確認すると、「それじゃあ、45ページを開いて——」という指示を眼鏡を掛けた担任が出した辺りから、彼女は小さく欠伸を漏らし、退屈そうにノートに板書する素振りを見せ始めた。

比較的長めの黒髪を後ろで一つに束ねた彼女——市木美帆とは、言うまでもなく東京武偵高校へと忍び込むために相模東当人に用意された名前と過去だ。偽の身分証明書は知り合いに作成してもらった。

それによれば、年齢設定は18歳。小学六年生頃から親の都合で渡米し、射撃技術を学び、各種射撃競技にも積極的に参加。15歳のときに帰国し、進学校に通い始めるも一年留年。

よく馴染めない普通科高校からアメリカで学んだ射撃技術を生かせるのではないかと思い、東京武偵高校に編入——といった具合であった。

大いに嘘だ。だが、渡米したことはある。高校を中退してからの話ではあるものの、アラスカで口径・375H&Amp;Hマグナムのウインチェスター・M70Pre64とランドール・オールパーパス・ナイフを手に、ときにヘラジカ、ときにグリズリーを仕留め、ラスベガスの砂漠では元FBIインストラクターから様々な射撃スキルを学んだ。

前述したランドール・ナイフは今も愛用している。ランドールは錆びやすいが、定期的なメンテナンスで何とか乗り越えてきた。いつになるうとも値の下がらない、すばらしいナイフである。

授業が終わり、放課後になると一目散にあてがわれた女子寮の自室へと帰った。玄関をくぐると、すぐに学校指定の防弾制服と髪を束ねていた白いヘアゴムを放り投げ、下着姿になった東は部屋の中に未だ点在しているダンボールをガサガサと漁り始めた。中から探し当てた黒のノースリーブとタンカラーのハーフパンツを身に着けて、そのまま洗面所の蛇口を捻り、溢れ出す水で顔を洗った。

「……そうそう手がかりはないか」

大きくため息を漏らす。そう簡単に初日から手がかりを得られるわけもない。当たり前だ。

雇い主が大きくバツクアップしてくれるとはいえ、情報を収集することで仕事が終わるならば悪くない話だ。そういった考えから、遠回しに様々な生徒に訊ねてみたもの——結果は空振りに終わった。

他に今日したことと言えば、半ばぼんやりとした思考で授業を受けたことと、好奇の視線とともに群がってくる学生たちを適当にあしらうことだけだった。

ベッドの上へ脱力し、枕へ顔を埋める。

「何やってんだ、オレ……」

その後、疲れていたこともあり東は死んだように意識を手放した。明日中には、荷物の整理を終わらせよう。眠る最中にそう思った。

次の日。案の定、東は危うく遅刻しかけるところだった。

東京武偵校も言うなれば普通科の公立高校に毛が生えたようなもの、要するに職業高校の一つに過ぎない。通常のカリキュラムの上に専門教科。これは工業高校、商業高校でも何ら変わりはない。

ただ、ここでは午後からの授業のみが専門教科？？ここでは学科という？？になる。

アサルト スナイプ レザード ダギュラ インクスタ レヒア アムド
強襲科、狙撃科、諜報科、尋問科、探偵科、鑑識科、装備科、
ロジ コネクト インフォルマ メディカ アンビュラス SSR
車輜科、通信科、情報科、衛生科、救護科、超能力捜査研究科、特殊捜査研究科……この内から一つを選び受講するというスタイルを取っている。

ちなみに、東が在籍していた頃は装備科を選んでいた。理由は単純でガンズミステイニングを習いたかったからだ、残念なことに科の八割以上が銃というものを理解していない大馬鹿者ばかりだったため、人によつては“ライフル弾を用いるシングルアクション・リボルバーにサプレッサーを取り付け、フルオートで撃てるようにした原理不明の何か”を生み出した強者もあり、そんな有り様であるから、自分がもっともまともだったのではないか、と思うほどだった。

東？？もとい市木美帆もそれらの内どれかを選ぶ必要があるが、すぐには決まらないだろうという教師のありがたい心意気により、しばらくは様子見となった。せつかくだから、装備科以外で習いたいところではある。

とりあえず、条件としては射撃を重点的に行えるところがいい。IPSCやスタイル・チャレンジのごとく拳銃で標的を狙い、速度と命中精度を向上できるような。

なら、強襲科か。だが、ライフル引っさげて突入するのはオレの趣味じゃない。いや、待て。散弾銃でもいいならアリだな。幸い、お気に入りのおパスもある。

他所に行っても撃ち合いを習うところはない。なら、選択肢は一つだけだ。

その日の五、六限は二限続けて自習となった。確か、授業初めに来た教師が理由を告げて出て行ったはずなのだが、あいにく眠っていたため記憶がない。黒板に書かれた『今日は自習』という文字を見て初めて知った。

とりあえず、欠伸を一つ漏らした東は仕方なく、2・Dと書かれた教室を一人抜け出し、射場へと向かうことにした。一応、“射撃練習という名の自習”である。文句は言われまい。

射場ではすでに何人かが撃っているらしく、連続した射撃音が聞こえてくる。見ればみな二年らしく、その中でも目を引いた比較的ガタイのいい男子生徒はコルト・パイソンを、プラチナ・ブロンドのストレートを二本の三つ編みにし、さらにつむじの辺りで結わえた女子生徒はCZ100を撃ち込んでいた。挙げた二人を含めてもざっと十人だが、レンジの数は十二。まだ空きはある。

レンジ・オフィサーに身分証明書を見せ、フェデラルのFMJ弾をそれぞれ違う口径で二箱ずつ買ってレンジに入った。右手には弾箱、左手にはスポーツバッグが提げられていたが、バッグは各種調整ツールやら予備の銃、弾薬などを入れておくためのものだ。

思えば、東は再び武偵校へ舞い戻ってきてから一度も帯銃したことがない。何となくだが、スカートの下にレッグ・ホルスターを身に付けて携帯するというのがどことなくバカらしく感じたからだ。そんなややこしいことをせずともヒップ・ホルスター、あるいはシヨルダー・ホルスターを身に付け、上着を羽織ればそれでいいではないか。

そんな風に思ったためか、レンジの卓にバッグを置いた東はベルトと二つのヒップ・ホルスターを腰に着け、その場で支度を整えていた。常にコンシールド・キャリアしている生徒からすれば不思議がられるだろうが、何のことはない。ただのこだわりである。

利き手の右側にはオート、左側にはリボルバー対応のホルスターを取り付けてある。それぞれスタンダード・ドロウ、クロス・ドロウとなっている。

私物のイヤー・プロテクター、それと黒のシューティング・グローブを身に付けた東はさっそく右のホルスターからキンバー・カスラムCDPIIを取り出した。全体的に角が丸められ、引っかかりが少なくなつた・45口径、装弾数7発の1911である。キンバ

ーの1911はフルカスタムに近い状態でありながら、その割にコスト・パフォーマンスに優れているため、故障してもすぐに買い直しが利くことから米国ではSWATなどの一部公的機関がこぞって使用している。近年では海兵隊でも採用された。

編入する前に東は二挺の拳銃を新たに購入していた。グロック・22AACサブレッサーカスタム、そしてキンバー・カスタムCDPIIである。

使うかどうかはさておいて、とりあえず少しでも新入りらしさを演出しようと購入した新品であったが、やはりというか、あまりしっくり来ない。使い慣れていないからだろうか。そうならば、使い込んでいればどちらともなく馴染んでくるはずだ。

「やっぱ、こつちじゃないとな」

数発撃った後にキンバーから弾倉、薬室の実包を抜き出してバツグに仕舞い、代わりに登場したのはコルト・プリウオーナシヨナルマツチをベースにしたカスタムだった。ナシヨナルマツチには外観上はノーマルのものと何ら変わらない戦前型と一目見ただけでナシヨナルマツチと判別できるほど各部に専用パーツが装着された戦後型が存在する。東のそれは前者を改造したものだ。

レッドインサートの入ったランプタイプのフロントサイト、スライド後尾にはフル・アジャスタブルに調整できる今は亡きボーマー・サイト、そしてトリガーはグリーブのあるロングタイプに、70年代ならば定番だったハイグリップが可能ないように突き出し量が調整されたワイドグリップ・セフティ。

固定方法はオリジナル通りのブッシング方式で、ロング・リコイルスプリングガイドが装着されている。バレルはバーストのステンレス製だが、ランプ部分に若干肉盛りと整形が成されている。その他としてはマグウエルの装着とグリップの変更だ。

グリップパネルはアキュラシー・グリップを装着している。このグリップはいくつかの付属品と取り替えることで使い勝手を自由に換えられる。例えば、リアサイトから見て左側のパネルはサムレス

トとの有無を選択することができる。反対側はといえば、パネル上部を五種類の厚みの違うパーツと入れ替えることでガンスミスに頼ることなく、トリガー・フィンガーと引き金との距離を適切な位置に調整することができた。この部分がアキュラシー・グリップ最大の特徴とも言え、メーカーもそれをセールス・ポイントとしている。その他の変更点と言えばメイン・スプリングハウジングをステイプリングの施されたストレートタイプに変更した程度で、口径は・45ACPとベースとなったナショナルマッチからなんら変わりはない。

コルト・プリウオーナショナルマッチカスタムの銃把へウィルソンの八連発弾倉を差し入れ、スライドを引いた。銃口を標的に向け、身体の重心を若干前気味に倒す。左手は右の手の平の上へ重ね、親指はセフティの上に置いている。いわゆる、ダブル・ハンドの構えだ。

銃口、右腕、右目。標的に対し、一直線となった。そこで引き金に指を掛け、じわじわと力を加えて引いていく。

引き金は軽かった。眼前で閃光が瞬いた途端、轟音とともに手首に強烈な反動が襲ってきた。が、東の眼はそれらすべての瞬間をしつかりと捉えていた。射撃慣れ“し過ぎた”東の眼はフリンチングを起こさない。

手元にある双眼鏡で確認すると、25ヤード先の標的紙に、やや九点よりの十点圏に大柄な11・45ミリ以上の大穴がポツカリと開いていた。東は思わずニンマリとした笑みを浮かべ、構え直して連射する。さすがに散らばるが、二連射のダブル・タップはそれなりに正確だと自負していた。

ホールド・オープンした銃から空弾倉を抜き出し、卓の上に置いた。たった八回の撃発でもスライドやバレルは充分に熱を帯び、素手で触れば火傷をしかねない。それも踏まえて射撃時リスクを減らす方法の一つがシューティング・グローブの着用なのだ。

少し離れたレンジで、例のパイソンを撃っていた男子生徒が舌打

ちする。「くそつ、やつぱりボルバーじゃ当たらねえのか！」

バカはお前だ。パイソンには現用オート、ベレッタ・M90・TWO並み、いやそれ以上の精度を叩き出す伝説のバレルを持っている。そんな国宝級のようなものをバカス力撃つといて当たらないわけがない。

射撃を中断した東はため息をついてレンジから離れると、その男子生徒のほうへと近づいた。おおそ真後ろ近くまで来た時、ようやくその理由がわかった。

「今時、真面目にダブル・アクションか……」

パイソンの射撃精度は現用オートと比べても遜色ないことは先に述べた。だが、このパイソンという拳銃には最大の欠点がある。それは、トリガー・メカニズムで、特にダブル・アクション射撃の際にその欠点が明白になる。

S&Wのものとは比べて落ちどころが掴みにくく、また、トリガー・プルも重い。そのため、ダブル・アクションでの命中精度はまったくもって見込めない。ただし、シングル・アクションの際は何ら問題はない。

その点を解消したのが東の所有するスモルトになるわけだが、トリガー・メカニズムがS&Wのキレのいいものになっただけとしても東の射撃方法は一切変わることはなく、どちらであろうとも特に困ることなく使いこなせる。

再びため息をついてから、男子生徒に声をかけた。

「おいおい、ひでえ当たりだな。ショットガンで撃つたのか？」

男子生徒が勢いよくこちらを振り返る。驚愕の表情のまま、男子生徒は言った。

「う、うるせえな！ 俺だって真面目に撃ってたんだよ！」

「真面目にねえ……コルト・パイソンなんていう高級拳銃使つてその程度か。宝の持ち腐れだぜ、お前が下手糞なせいで」

途端、「文句あんのか」と言わんばかりに胸ぐらに掴み掛かるが、東は男の眼前でチツチツチ、と指を左右に振る。

「仕方ないから教えてやろうって言ってたんだよ。なあに、すぐにも当たるようになるさ」

すると、先ほどの態度からは打って変わり、子供のように目をキラつかせながら「本当か!？」と訊ねてきた。

「嘘は言わない主義でね。まあ、ちよつと見てるよ??」

と、東は標的と向かい合った。左のホルスターからスモルトを取り出し、照星と照門を一直線上になるよう合わせる。

「今のご時勢、リボルバーのダブル・アクションで真面目に射撃するのは時代錯誤もいいとこだ。だから――」

静かに撃鉄を起こし、シングル・アクションへと変える。

「こつやつてやんだよ」

瞬間、撃鉄が落ちる。引き金は軽いうえ、良質な精度の銃身との相乗効果、さらには本人の腕がうまくマッチしてなのか、銃身が跳ね上がるより少し前に、38 s p r i n g セミ・ワッド・カッター弾頭が十点圏に命中した。

彼もそこまでならわかる。だが、それで次弾を撃ち続けようとすれば射撃後に再び撃鉄を起こさねばならず、少々煩わしいこともあってオートほどのすばやい射撃は到底見込めない。

が、東は違った。銃身が跳ね上がり、再び水平に戻る間に添えた左手で撃鉄を再び起こしたのである。これによって、次弾からも引きが軽く、正確なシングル・アクションで発射できる。

発砲、跳ね上がり、コッキング、発砲……その一連のシークエンスは六発撃ち切るまで続いた。

全弾撃ち切った東はフーツ、とため息をつき、

「??? 撃った後銃口が完全に跳ね上がってから、銃身が水平に戻る間。この間に撃鉄を起こす。そうすれば、オートとほぼ同等の速度、んでもって正確な精度が望めるようになる」

そう言つと、男に軽くウインクをして「がんばれよ」と肩を叩いてレンジから出て行こうと踵を返した。

「ちよ、ちよつと待て!」男子生徒が引き止めにかかる。「お前、

すげえ射撃うまいんだな??? そっぴや、今気づいたが見ない顔だな。お前、クラスと名前は? ちよつとぐらい教えてくれたっぺいだろ? な?」

態度がガラリと変わっている。さすがに東でも向こうが何を考えているかわかった。おそらくは『手取り足取り教えてくれた女子生徒と少しでもお近づきになりたい』に違いない。

パイソンの同学年らしい男子の顔立ちが悪くない方で、恋人がいてもおかしくはなさそうであるが??? 世の中とはよくわからないものだ。

?? オレみたいなガサツなヤツとお近づきになりたいってか。

東は思わず吹き出しそうになったが、何とかこらえ、できるだけ飄々とした様子のまま、振り返って言葉を返す。

「2年D組、市木美帆。学科はまだ特に決めてない。最近、転入してきたばかりなんでね」

再び踵を返し、ようやく収集した銃火器が置かれた自分のレンジへと戻った。

その後、教える様子を見ていたらしいCZの女子生徒からも射撃を教えてくれ、と言われたのはまた別の話である。

HOME 111 (後書き)

さて、少し遅くなりましたが続きになります。

どうしてこんな原作クラッシャーな『緋弾のアリア』二次創作を始めたかと言いますと、原作の銃器描写に我慢ならなかったわけですよ(笑)

ドラグノフで1000kmオーバー? 無理です。加えて、精密な射撃はドラグノフ、構造上不可能です。自分が作者ならサコー・TRG-42かベレット・M98B辺りの・338ラプアマグナム弾を使用するライフルを使わせます。

ベレッタ・M92FS/INOXで三点バースト&フルオート? 昔、大藪大先生がワルサーP38でやってましたが、銃器情報なんざ調べりやすぐにでも出てくるこのご時世、そりゃあないでしょう。

……と、まあ代表してもこんな感じ。

しかし、です。自分は『緋弾のアリア』が嫌いなわけではございません。嫌いだったらそもそもこんなことやってません(笑)

『愛』ゆえです。ええ、愛ゆえに。好きだからこそダメな部分を二次創作で修正してやるう! っていうただの自己満足なわけですよ(笑)

とりあえず、これを読んでいるそのガンマニアな君! 『緋弾のアリア』は私含む諸君らに課せられた一種の課題である! 「俺ならちゃんと銃器描写して見せらあ!」と作品を書き上げてラノベ大賞に送りつけてください! 今のところ、シグサワー先生とアサウラ先生ぐらいしか通ってないんですから、ガンマニアな作品書ける人(大笑)

それはさておいて、感想くださいよ感想（ry

じゃ、また会えたら会いましょう。 God bless you

u
!

東が武偵校へと転入してきてから数週間が過ぎた。ある程度の時間が過ぎた頃には、新入りというものも大方クラスになじめているものである。ただし、あくまでもうまく振る舞える者に限られているが。

東の場合、中心にはならずともある一定の距離を保ち続けることに成功し、クラスからはぐれた存在にはならず済んだため、「クラスに在籍している経歴が少し変わった中の上クラスの実力を持つ女子生徒」という評価を得たのである。

武偵ランク。それにはAからEまで存在し、民間からの有償による依頼解決の実績や各学科の定期試験から弾き出される数値でランク付けされることになっている。一部SやRなども存在するが、武偵の大多数は前述した五つのランクで割り振られているため、特に気にかけることもない。

「Aか……」

全体としてはA。特に射撃においてはズバ抜けた才能を誇る期待の新人とされ、射撃だけならSだという評価も聞いた。次いで評価が高かったのはCQBに置ける銃火器マスタイズの扱いだった。

今から一月半前、東は教務科教務科に一枚の書類を提出した。それには強襲科への所属を希望すると書かれており、数日後にそれは認可された。

その際に二丁の銃器を入手した。その内の雄がかつて自衛隊にて採用されていた豊和・64式小銃だった。

64式小銃は現在制式とされている89式小銃が用いている5.56ミリNATO弾よりも大口径かつ、強力な7.62ミリNATO弾を使用するバトル・ライフルである。当時、アメリカの正式採用銃はスプリングフィールド・M14で、当然自衛隊でも採用を検

討したが、あまりの使い勝手の悪さに閉口し、採用を見送ったとの話もある。やはり、日本人には長く重いM14は使いづらかったのだろう。それと「自衛隊の主力火器は国産にしたい」という上層部意向もあつたとされる。

そんな声を受け、急ピッチで設計・開発された64式小銃ではあつたが、使用する7.62ミリ弾は装薬を約10%削減した減装弾を使用することとされていた。それに加え、撃鉄のストロークは長く、ハンマースプリングを比較的弱いものにするることによって発射サイクルは非常に遅く、約500rpmほどだったという。これはかの有名な名銃コルト・M16A1の連射速度が約800rpmだったことから比較的ゆっくりとした発射速度を誇っていたことが伺える。

これらの特徴は威力、射程および制圧力の低下を糾弾されてもおかしくはない。が、逆を返せば反動の大きい大口徑弾をフルオートで撃ち出そうと考えれば装薬を減らしたほうがコントロールがしやすく、命中精度、及び集弾性も向上する。また他国では制御を容易にできなかった7.62ミリを“コロンブスの卵”的発想で解決させた本銃はもう少し賞賛されてしかるべきだろう。

しかし、急ピッチで開発されたことと自動小銃にノウハウがなかったことが災いしてなのか、いくつか欠点もある。

有名どころとしては非常に倒れやすいフロントサイト、少々手荒に扱うと外れるハンドガード、緊急時に素早い切り替えが不可能な『ア・タ・レ』式セレクター、そして長すぎるトリガー・リーチと利点よりも欠点のほうが多いという状態である。

が、ここで一つマイナーなものを挙げたい。それはロックタイムの長さである。

『引き金を引いた後、撃鉄が落ちるまでの時間が異様に長い』。要するに、引き金のキレが悪いともいう。

これは前述したフルオートでの制御性を実現するためのいくつかのアイディアが関係している。ともかく、フルオート制御が容易と

なる変わりに、その機構がセミオート時の精密射撃においての欠点となった。

元より、64式小銃が減装弾を用い、引き金を引いてから撃鉄が落ちるまでのロックタイムの長さを備え、またベルギーのFALがフルオート制御が困難となった結果、セミオート・オンリーの半自動式小銃へと変貌したのもすべてアメリカという大国がNATOという一つの軍事グループで弾薬などの共通化を図ったことが原因なのである。

「おいおい、何だそれ？」

64式を手に入れた後に参加した強襲科の突入訓練直前、即席でバディを組まされた男子生徒から言われた一言だ。

「それって自衛隊の欠陥銃だろ？ どこでそんなもん手に入れたんだ？」

東はご想像にお任せする、と返したがタネを明かせばこうだ。先日、陸自の基地まで出向き、銃器の管理担当へ「64式を一丁35万円ほどで譲って欲しい」と極秘に交渉したのである。この35万という金額は89式小銃の“もつとも高額だった際の単価”であった。これは、64式小銃の単価の約二倍に当たる

無論、大いにモメたものの、相手側も金が欲しかったのか、「38万ならば考えてもいい」との回答を受け、結果、東が妥協しての40万での取引となった。

上乘せしたこともあつてか、比較的良好なものを譲ってもらえることとなり、後日届いた64式はメーカーから納入された状態のデッドストックだった。

「つーか、使えんのかそんなデカブツ」

そう男子生徒がけけらと笑う。

確かにそのままでは64式はあまりに使い勝手が悪すぎた。そのため、到着したその日のうちにいくつか改良を施した。

まず、倒れやすいフロントサイトを溶接、ハンドガードには黒い

ビニルテープを用いての固定。トリガー・リーチに関してはそれに付き合いのあるガンズミスに頼み、東の手に合ったウッド・グリップを作ってもらい、事なきを得た。

セレクトターに關しても対処法があり、緊急時に限ってだが、セレクトターを『ア』と『タ』の中間に置き、発砲時にはすばやく『タ』へと押し下げると言うものだった。

しかし、いくら安全装置があろうとも、最大のセフティはトリガー・フィンガーである。なぜなら、指がトリガー・ガードに入っていれば安全装置があろうとも引き金に指が触れる確立は八割以上になり、発射直前の状態となるからだ。

『ブラックホーク・ダウン』でM4A1を撃発可能状態のまま安全装置を掛けず、スリングで肩から常にぶら下げている兵士が言う。

「俺の指がもつとも確実なセフティなのだ」。

その他にも拡張性を向上させるため、某インターネットオークションで出品されていた実銃用に製造された両サイドのレイルシステム、マウントベース、アンダーマウントベースの三つを落札し、64式へ取り付けるなど全体からしてもかなり大掛かりな大改造だった。

いや、それ以上に――。

「でもよお、それバトル・ライフルだろ？　ちゃんと『銃検』取ってあんのか？」

『銃検』とは国家公安委員会が発行する銃器検査登録制度のことであり、言うまでもなく、許可申請には多大な時間と労力、そして現金ナマが必要となる。一応のロウ・エンフォースメント――《法執行機関》である武偵ならば一般人と違ってフルオート火器に關しても降りる可能性はゼロというわけではない。

しかし、武偵には日本国憲法第九条と同じく厄介な決まりが存在し、それが武偵法第九条『武偵はたとえ仲間が殺されようと、自分が死のうと、人を殺してはいけない』である。これを『武偵は必要な苦痛を与えてはならない』と拡大解釈する者も多いため、軽機

関銃ならともかく、こういったバトル・ライフルですら同僚ほかからお咎めを受けてしまいがちだ。

「ちゃんと取ってあるから、心配ご無用。それにな、取り回しが悪そうだとか言うが、ステーキ野郎の国じゃスプリングフィールド・M1AのCQBモデルをベースにセージ社のEBRストック付けてタクティカル・スクールで使ったりもするぐらいだ」

だから、CQBに持つてくのはあながち間違っではないんだぜ、とわざとらしくウインクする。銃検に関してもそうだ。生徒によってはアサルト・ライフルを得物にするヤツもいる。7・62ミリだつてご法度は食らわないはずだ。

「狩猟法の口径規定には反してないから問題ないだろ」

東の言った狩猟法の口径規定は「5・9ミリ以下の物は認めない」というものだった。が、言うまでもなく、全自動火器も認められないため、東の主張も曖昧なものではある。それに銃検に関してもアンダー・グラウンドな仕事をする知り合いに頼み、偽造した書類で許可を得ているから何ともいえない。

そんな会話を交わしているうちに、東たちの番が来た。訓練、というよりは実習に近いが、二人一組でバディを組み、コースが組まれた一室に突入していかに早く標的を倒してゴールするか、というものだった。

無論、標的には人質も紛れ込んでおり人質を撃つと一人につき、タイムが五秒プラスされることとなっていた。

「デカブツだけに足手まといにならないでくれよ？」

ニヤニヤと笑いながら、男子生徒は自身の額にバンダナを巻く。東はフン、と鼻で笑い、アンダー・マウントに取り付けられたマグプル・A F Gに左手を添えて横からハンド・ガードを握る。俗に言う“コスタ撃ち”の構えだ。

言うまでもなく、黒のシューティング・グローブは両手に着用済みだ。そうでもなければ連続する射撃で熱せられたハンドガードで火傷を負いかねない。

「じゃあ、行くか——」

バンダナも用意が整ったらしく、よつこらせと腰を上げた。手にはピエトロ・ベレッタ社のP×4が握られている。撃鉄が露出していることから、TYPE-FかGであることは容易に識別できた。軽く会釈を返した東は手にした小銃の安全装置を外して『ア』と『タ』の中間から一気に『レ』へと動かした。それを念入りに確かめた後、コース入り口となっている扉の前に立つと、勢いよくそれを蹴飛ばして中へ飛び込んだ。

それと同時に『スタート』というどこか無機質なアナウンスが耳に入ったが、まったく気にもかけない。否、そんな暇はない。

すぐさま64式小銃を目線辺りまで持ち上げると、レシーバー上方に取り付けられたエイムポイント・COMP-M2ドットサイトを覗き込み、中の赤点^{せきてん}をターゲットに合わせて引き金を引く。途端、眼前でマズル・フラッシュが瞬き、銃口の先の標的は破壊される。装填されている実包は自衛隊で64式小銃に使用されている前述した専用弾を参考に東自らリロードした減装弾だが、実用には十分な威力と装薬を減らしたことによって謳われるとおりの命中精度と容易なコントロール性を示した。

加えてトリガー・ハッピーのように引き金を絞り続けず、適度に指切りを混じらせたバースト射撃を行ったため、現用アサルトライフルと比べて少ない装弾数をカバーすることにも成功した。

二つ目、三つ目の標的を破壊し、「クリア！」と叫ぶ。相方からも同じような言葉が聞こえる。無事に第一エリアはクリアしたようだ。

エリアは三つあり、当たり前だが徐々に難易度が上がっていく。初めのステージはやや優しすぎたかもしれない。

「この調子だと余裕だな……」そんな声も聞こえるが、油断した時点で成功には程遠くなり、ミスの確立が大幅に上がる。

それが証拠に次のステージではバンダナが余裕たっぷりになや不真面目な態度で標的を撃っていたため、二発外れ、時間がややロス

した。

クリア、の掛け声とともに次のステージへと移るが、その途中で東は弾倉を新たなものへと入れ替えた。と、同時にP×4を携えたバディへと目をやる。やや焦っているようで、顔を落としてブツブツと何か呟いている。

「落ち着けよ。いいタイムを出したいのはわかるが、そんなんじや腕に力が入りすぎて逆に当たらない」

と、東は諭すように声を掛ける。

「まずは腕の力抜いて、マグ・ウェルに次の弾倉入れてスライド引け。デコッキングはするなよ。どうせすぐ使う。指はトリガーガードの外。今、そいつのセフティはトリガー・フィンガーだけだから」

バンダナは小さく頷いた。

結果は悪くはなかったものの、トップではない。せいぜい中の上といったところか。

予想していた通り、相方の男は初弾こそ当てたものの次の標的を外し、さらにタイムを落としたりうえ、あろうことか人質的を狙ってしまった。それで緊張が限界を迎えたのか、動きを止めてしまい、さらなるタイムロスを引き起こしてしまった。

それを見かねた東は自分が担当するであろうスタイル・ターゲットをすべて倒し、男の残りの目標をも破壊して、何とかゴールした。が、本来二人一組で制圧するはずの部屋を一人で制圧するとなるとやはりタイムロスは避けられない。その上、東の得物は自動小銃、それも前世代のバトル・ライフルだったため、拳銃と比べるとやや取り回しが悪い。

謝りにきた男子生徒に過ぎたことはもういい、と手のひらを振って別れた。その後放課となり、東は64式を肩から提げ、寮と学校との間を行き来するバスに乗り込み、帰路に着いた。武偵校には部活をしている者も少なくはないが、帰宅部の者も同様である。その

ため、帰りの始発は混雑を避けられない。

そうになると小銃が邪魔になるが、暴発を避けるために薬室は空にし、そのうえ安全装置も掛けられている。チャンバーが空ならまず暴発は起こりえない。

女子寮に到着し、東は気だるげな身体を引きずって自室へ帰った。やや薄暗い部屋の照明を点けると、突如目の前に横に長い梱包された包みが置かれていた。不在届けはなかった。

東は64式小銃を部屋のガン・ロッカーに立てかけるとすぐさま包装紙を破り、中身を取り出した。ペリカン製らしい頑丈な黒いコンテナが姿を現し、さらにコンテナを開封する。

包装紙、コンテナ——それら二つにに護られて届けられたのは一本のスコープと一丁のボルト・アクションだった。一見、チークピースを備えた木製ストックを備えたありふれたライフルのようにも見えるが、銃身の先端にあるはずの照星は銃身と同じ肉厚の延長銃身のような部品の後方へ移動し、標準的なライフルとはやや趣が異なる。スコープはリユーポルドの上質なものがマウントリングとセットになっていたたていたほか、予備であろうか、ライフルの銃口付近に取り付けられている筒のような部品がもう一つ付属していた。東はそれを構えるとボルトを引き、ボルト・オープンの状態にさせてから銃口を覗き込む。銃口向かって螺旋状に放物線を描くライフルリングの類は一切入っておらず、見るものをやや不審に思わせるなら、これは何なのか。

ボルトをコンテナの中へ戻すと、表の蓋に貼り付けられていた一枚のコピー用紙が目に入った。セロハン・テープを剥がし、文面に目を通した。途端、東の口から笑いが込み上げてきた。

銃は64式のグリップを作った知り合いのガンズミスから送られたもので、メッセージは注文どおりの品は届けたとの書き出しから始まり、『そっちの仕事で大いに使えそうな銃を作る余裕ができた』と締め括られていた。

T A G 1 (後書き)

どうもお久しぶりです。ハインケルです

二ヶ月の放置なんて自分もビックリです。ここだと、更新速度の早いほうがリピーターさん付きやすいんですけどっけ？　じゃあ、自分ダメじゃん……orz

まあ、遅筆はひとまず置いて、楽しみにしてくださった方々……は、あんまりいいとは思いますが(笑)、遅れて申し訳ないモチベーションが悪化したりいろいろとあった——ということにしといてください、お願いします(泣)

まあ、なんやかんやで64式小銃登場。とりあえず、参考にしたサイトは後述するとして、書いたことは『事実』です。

命中精度がいいのは『フルオート』の時だけです。セミオートで狙撃銃に用いるには厳しいロックタイムとトリガー・システムを併せ持つ自動小銃なんです。64式は。

その代わりにフルオートでのコントロールおよび命中精度、いやここでは集弾性能と言うべきか、それらが非常に優れています。

また、各種拡張レイルは実際に存在し、ヤ○オクなどで見つけることができます。カテゴリをトイガンにして“64式”で探すと大方出てきます。タスコ・ジャパン製です。思うにホビーフィックス製の高級モデルガンには付けられると思います。TOP？　一説にはちゃんとした造型の電動ガンに作り直して再販するという噂もあつたり(なかつたり)するので、もし再販されたらできるかもしれません。

あと銃検。最新巻(10巻)にその辺りの記述を発見し、急いで盛り込みました。M60が違法なのはわかるが……なぜにM188

7まで違法なのかがいささか不明。まあ、ソウドオフはイカンとしても散弾銃自体に罪（違法）はないんですが……（苦笑）

事実、レプリカなら所持できますしね、M1887。もちろん、猟銃免許ほかを取得したうえで、ですけど……。

理子のM1887はレプリカだというのは明白です。言うまでもなく、M1887オリジナルであれば旧式の黒色火薬ですから（黒色火薬使用の銃器に現用の無職火薬の装弾は使えない）。

というより、白雪のM60がわざわざ初期型なのかがわからない。せめてE3ぐらい持たせてやれよ！ あるいはE4 or Mk-43を！ と叫んだのは自分だけではないは（ry

今回もうんちくばつかりで話が進まなかったわけですが、次回から進むはずです。たぶん。

それがいつになるかは不明ですが（え

ギヴ・ミー感想！

じゃ、また会えたら。 God bless you !

参考サイト

○25番（<http://takas25ban.sakura.ne.jp/>）＜『武器庫』内にある銃雑記の1、2。その中にあ
る64式小銃に関する文面から＞

番狂わせ かんぱちにぎり寿司580円（前書き）

この作品は『緋弾のアリア』の二次創作——のはずでしたが、作者の頭のネジが外れた結果、どっいうわけか番外編と言う形で“半額弁当争奪戦”をやらせることになりました。ご了承ください。

番狂わせ　かんぱちにぎり寿司580円

夕方四時前。放課となり、教室を飛び出したオレはそのまま寮の自室へは帰らなかつた。変わりに、モノレールに飛び乗って、駅から歩くこと徒歩十分。向かった先はある一軒のスーパ―だった。

イオンやイトーヨーカドーのような大規模なデパートではなく、例に挙げればプライス・カット、オークワなどの類——純粋なスーパーマーケット。ただし、経営には大きく全国農業協同組合が関わっている点で例に挙げた二店とはやや趣が違ふ。

駐車場から店舗を前にして深く深呼吸する。途端、中から懐かしさがこみ上げてくる。

今となつては昔のことだが、かつてオレはここを縄張りとした一匹の“狼”だった——。

あれは確か、武偵校に入学したての15の頃。弾代や銃のカスタム・パーツの代金などがかさみ、日々の生活に困っていたオレは気乗りしないまま金策に駆け回ることとなった。

合法的に金を得る——その結論としてアルバイトに至るのは時間の問題だったのは言うまでもない。

初めてのアルバイトは焼肉屋での皿洗いだった。目を閉じれば今でも思い出す。あの、むせ返るような排水溝から漂うドブの匂い。食洗機のアラーム音、そして、タダで食わせてもらった賄いの味……。

だが、そんな日々もある日突然に終わりを告げた。解雇。理由としては昨今の不景気が大いに絡んでいるのは間違いなかつた。

結果として、約半年弱という短い間ではあったものの、オレは初めての職場を後にした。

視線を店舗の自動ドアから店の名が刻まれた看板へと移す。照ら

し出された看板は夜の空へ向かって誇らしく輝いて見える。

その後、クビにはなったが、すぐさま次のアルバイト先を必死になつて探し回った。言うまでもなく、働かなければ飢えて死に絶える結末しか待つておらず、死を避けるためには金を得るほかなかった。

それに――その日の夕食にありつくには金が必要が、金を得るのはタダ同然。こんなにうまい話はない。

さまざまな思惑を抱えつつ迎えた次の仕事はスーパーのレジ打ちだった。

二週間ほぼ毎日出勤という地獄のような研修期間を終え、それからさらに三カ月後。オレは着々と仕事を覚えていたものの、未だによくわからないことが一つあった。

それは店内にあるすべての弁当、惣菜、寿司類が一気に半額になる午後六時手前。惣菜担当の白い割烹着に身を包んだ店員が半額シールをすべて貼り終え、事務所のあるスタッフルームに消えた途端、唐突に感じる緊張感と歓喜の声、そして、肉の弾ける音。それらすべてが何なのか、オレは何度もレジ台から身を乗り出し確かめようとしたが、距離の問題もあり何が起こっているかはさっぱりわからなかった。

そのうえ、ちょうど6時から7時に掛けてまでが夕方時刻で最も来客数の多い時間帯であり、そんなことも気にしていられないほど忙しくなる。それに、そのスーパーには夜の時間帯は基本、チエッカーはパートとアルバイトを混合して三人前後しかおらず、確かめに行く余裕もない。そして、その狂乱的な熱気が去ったあと、半額弁当や寿司を手にしてレジに並ぶ者たちの身体は決まって傷だらけだった。

七時前になり、少し遅めの店内のゴミ箱と外に設置されたりサイクルボックスの資源ゴミを指定されたビニル袋に詰め込み、ゴミステーションへと置きに行った帰り、いつもの日課である売れ残りの

弁当や惣菜を確認しに行く。

実際にスーパーなどでアルバイトをしたことのある者ならばわかるだろうが、閉店した後、売れ残った惣菜はパックと野菜と魚、おかず、ご飯などに細かに分別され、処分される。店によって様々だろうが、オレが働いていた店ではコンポストと呼ばれる灰色の細長いプラスチック製のゴミ箱に放り込まれた後に業者に回収され、豚の餌になる、と以前聞いた。

もったいない。だれもがそう思う。しかし、店の方針で処分品を口にしてはならないという決まりがあり、腐ってもいない、まだ十分に食べられるような寿司を眼前にしてそれを口に入れずに捨てる。その繰り返しの中で何度涙を呑んだことが。

オレの食事よりも家畜の餌のほうが豪華じゃねえか。そんな不平も何度漏らしたかわからない。しかし、惣菜や弁当が半額になった後も売れ残るのは現実であり、揺るがない事実だった。そして、当時のオレの食事が、豚の餌以下のレヴェルであったことも。

そんなある日、チエツカー係の主任を勤めていた副社員——チーフに訊いた。あの弁当類が半額になったあの瞬間、いったい何が起きているのか、と。

すると、チーフはいつものように笑ってこう言った。「半額弁当の争奪戦しとるんよ」

言うまでもなく、言葉の真意は飲み込めなかった。そこで、オレは無謀ながらシフトが入っていない日に店を訪れ、その瞬間を待つてみることにした。

店に到着してから約十分後。時間が気になり、左手に付けた腕時計を見る。その当時からずっと愛用しているカシオのデジタル式腕時計F-84-W1の時刻表示画面はあと五分程度で六時を回ろうとしていた。

すると、惣菜部門と店舗の惣菜売り場とを結ぶ扉が颯爽と開き、例の割烹着を着た社員が現れた。すると、店内がピリピリとした緊張感に包まれ、急激にざわつき始める。思わず何事かときよろきよ

ると周囲を見渡すものの、特におかしなところは一切見当たらない。半額シールを貼り終えた店員が一礼し、店の奥へと消える。瞬間、惣菜売り場へ数多の客たちがそこへ殺到する。老若男女関係なく、その飢えた瞳を光らせた獣たちは野生の牙を剥き出しにし、走る。そして、弁当の少し手前辺りで争奪するためのリアル・ファイトが各所で勃発し始めた。

飛び交う罵声、響き渡る断末魔、そして、ほとばしる血と肉のぶつかり合い——言うなれば、まさに戦場。地獄の深淵がそこに存在していた。

その地獄の底から、何人かがまるで大将首を獲ったように意気揚々とレジへと向かって歩き、オレのすぐ隣を通り過ぎて行った。彼らの手には手を伸ばせばすぐそこにあるというのに、今まで手をつけることの出来なかったうまそうな弁当や寿司が握られていた。

瞬間、オレは決意した。あの争奪戦——ハーフブライ斯拉ベリングタイム半値印証時刻に参戦し、必ずやあの弁当を食してやると。

しかし、現実はその簡単ではなく、初期の頃は連敗続きでただひたすらに苦渋を舐め続けた。

犬。猛者たちの中で何度もそう蔑まされ、嘲った。それも、“諦めの悪い雌犬”ブルドッグとして。

それでも、オレは戦い続けた。そして、先の見えない連敗続きの中である日唐突に何かを掴んだ。その“何か”は何なのかは説明できないが、一種吹っ切れた感じがあった。

そして、その日。ついにオレはその半値印証時刻という戦場で、初めての勝利を掴んだ。無論、その日食った弁当の味は今でも十分に覚えている。と同時に、この店でオレがもつとも好きな弁当のランク付けでは一、二を争うほどだ。

初めての弁当の味はさておき、初勝利の後、時折負けることはあったものの、おおよそほぼ毎回、安定して半額弁当を手にすることができるようになった。

思いつめていたことが吹っ切れたからか。それとも、バトル・スタイル戦闘形式が

変わったからなのか。

そうして、名もなき“狼”の一人となり、アルバイトの間を見て日夜弁当争奪戦に明け暮れた。そんな日々を送るうちに、オレにも二つ名が付いた。

そこからさらに勝ち続けること約一年。気づけば、その店を縄張りとする名うての狼へと成長し、他所の店へも現れては颯爽と弁当をかつさらっていった。

が、ある出来事の後、オレは狼であることをやめた。否、やめざるを得なくなった（、、、）。言うまでもなく、東京武偵高校からの退学が大いに関係している。

学生寮を追い出され、県二つほど離れた場所にその手の仕事を見つけたオレは、学園島から離れる必要があった。とは言っても、元々学生寮の借家以外島に住居を持ち合わせておらず、退学した時点で出て行かなければならなかったのだが。

かくして、武偵校、そして学園島をも去ったオレは成り行きとして狼としても事実上、引退してしまった――。

「まさか、こんな形で戻ってくることになるとは……」

正直、驚きを隠せない。「あれから、もう何年経つんだ……？」

気づけば酒と煙草を合法的に嗜める程度の年になり、猟銃免許も取得した。ライフルも所持したかったが、十年も待てなかったため賞金稼ぎの試験をパスした。正直なところ、猟銃所持のほうに難しかったと思う。

店のドアが開き、中へと入る。懐かしい風景と流行の曲に混ざってかかる店の宣伝曲――何もかもが、今となっては懐かしい。そして、その風景は何一つとして変わっていない。

すかさず、時刻を確認する。デジタル表示の腕時計の時刻はおおよそ五時半過ぎを差していた。

まだ半値印証時刻には早い。

こういう場合はただの一般客として紛れ、ただただ適当な商品を見ている振りをするのがマナーであり、狼たちの常識だ。例によってそれに従い、オレはパン売り場の棚に置かれた食パンの前で仁王立ちし、ただ無心にそれへと視線を送り続けることとした。

ふと、ひそひそと何人かの話し声が耳に入ってきた。小さく、それこそ店内のBGMでかき消されそうなほど小さな声だ。だが、不思議とオレにははっきりと聞こえる。

——おい、あいつつてもしかして……。

——ああ、そうだ。あのオリーヴドラヴのミリタリー・ジャケット……間違いない、ヤツだ。ヤツに違いない。ヤツが帰ってきた……。

——なぜ今になって……？

——おいおい、ヤツが消えてからもう三年以上は経ってるぜ？
今更高校生やつてるはずないだろ？　しかし、だ。どうして当時と同じセーラー服着てるんだ？

——留年してダブツてるんじゃないか？

——噂だと在学してた高校を中退したと聞くが……。

——……夜間にも通い始めたんじゃないか？

——いや、コスプレじゃないか？

——男ができて、そいつとの行為が終わった後でそいつにビールでも買いに走らされてるんじゃないかな。んでもって、その服装はヒモが怒鳴るから着替えるまもなくそのまま渋々と——。

——お前、いったん黙れ。

随分と好き勝手に言っているのがわかる。今すぐに脳天をはたきに行きたいが、店の迷惑となりうるのでご法度だ。店側で働いているから何が迷惑かは手に取るようにわかる。

何の前振りもなしに、誰かが隣に並び、突然声を掛けてきた。

「やあ、久しぶりだね——」

横目でちらとそいつの姿を確認する。一見するとダークスーツとネクタイを身につけたサラリーマン風の優男だが、どこかそれとは違う雰囲気を漂わせている。いや、雰囲気ではなくどちらかといえば土や木々の匂いからだ。

続けてかつての二つ名を口にしようとしたところで、オレは言葉を発した。

「ああ、しばらくだな——探偵」

すると、フツという笑い声が聞こえた。本職を呼んでもらえて嬉しいのだろう。

『探偵』とは二つ名であると同時に彼の本職も指し示している。本人が語るところによると、フィリップ・マローウに憧れて探偵になったが、仕事はペット探しばかりなうえ、人によっては自分の本職を目の前でそう名乗っているのに呼んでくれない人もいるという例としては『便利屋さん』など——。

「ハードでなくても、生きる資格に欠けていても、生きていかなくてはならない」

だが、探偵は良くも悪くもチャンドラーかぶれでことあるごとにマローウの名台詞を引き合いに出すだけでなく、口調や仕草にもそういった影響がモロに浮き出ている。大阪辺りに行けば格好つけと嫌われそうなタイプだ。

「俺の信条だ」

「どこからそうなった？」

「何度も聞いた話だろうが——」探偵はどこか遠い目をしてつぶやく。「五年ぐらい前に秘書と一緒にある事件を追ってね。その考えに至った」

「秘書ねえ……」

再び横目で探偵の姿を盗み見る。まだ若干若々しさが残っているようにも見えないことはないからおおよそ三十代だろうか。

「あんたの性格から察するに、どうせ美人の秘書を雇いたかった

んだろ？」

すると、探偵はわざとらしく肩を落とし、苦笑いした。

「そうしたかったよ。でも、結局秘書になったのは八十いくつかの女だった」

思わず噴出しかけた拳句に、むせ返った。ゲホゲホと咳き込む才しを尻目に探偵は言葉を続ける。

「秘書募集の広告を貼り出してから電話が掛かってきてね。募集してたのは三十代前後の健康な女性だったんだが——電話で声を聞くだけだとそうも聞こえてね。採用と言って次の日来てもらつと……まあ、そういうわけだ」

同時に「決してそういう趣味じゃないぞ」と釘を刺すのを忘れない。

「で、亡くしたって言つてたよな……？」

ああ。探偵は心ここにあらずといったような様子で答えた。

「ちょうど今から五年ぐらい前に病気でね。不治の病だったらしいが、その割に元気な婆さんだったよ。ひどくホラ吹きで自分は日本で初めての運転手と同期だったとか、今思えば笑えてくるようなことばかり話してたよ」

そうか。探偵がポツリとつぶやく。「あの婆さんのホラ話の相手はもう二度と出来ないんだな」

探偵のつぶやきの後はただただ沈黙が流れた。再び時計に目を向ける。六時までは残り五分を切り始めていた。

番狂わせ かんぱちにぎり寿司580円（後書き）

どうも、ハインケルです。もう一度書いておきますが、この小説作品は『緋弾のアリア』の二次創作だった“はず”です。“はず”でした。ええ、その“はず”に間違いなかったはず。

Q：どうして『ベン・トー』と混ぜたし！？

A：んなこと聞くな！

と言うのは理不尽無理すぎるので、理由を白状。

二つのうち一つ。自分が今現在、スーパーのレジ係兼売れ残り惣菜その他廃棄のアルバイトをしているからです。

だから、バイト関連の東の語りはほとんど『実話』です。初めのアルバイトからうまそうな惣菜処分の苦悩まで。

あ、焼き肉屋クビになった理由は詳細に言うと、『3・11の影響で売り上げが大幅に落ちたために行った人員整理（学生は生活に支障が出ないため、優先してクビにする）』のためです。が、この作品は『リーマン・ショック』と『3・11』は“なかったこと”にされているため、その辺りは記述しませんでした。

残り一つは——まあ、後ほど語ります。後っていつ？ 後編です。実はコレ、続きます（え

いや、本当は一本だけで行くつもりだったんですが、どういうわけか書き終えてみると『文字数（空白・改行含まない）』であつても『11114文字』という末恐ろしい数字を叩き出して案外長くなつてしまったので、前後編に急遽分けることに（笑）

後輩の鳳から「おいおい、8000文字まで至ったぜ？www」の時点で「長えよ！www」とのツッコミをよこしてくれやがったので仕方なく（ry

とりあえず、『ベン・トー』アニメ化おめでとございます。部長は俺の嫁。異論は（ry

部長の声がイメージのアウトラインとは重なってくれたので違和感を特に覚えないです。なんてったって俺の（ry

これだけでは何も書くことないでしょうが、できたら評価やら感想やらくださ（ry

じゃあ、後編で会いましょう。God Bless you！

番狂わせ 海の恵み(12貫) 1000円

その時、店内全体が徐々に殺気立って行くのに気づいた。半額神が現れたのだ。

ひょいと背伸びして棚越しに惣菜、弁当売り場を覗き見る。ちょうど半額神がゆっくりとしたペースで一目でわかるように赤と黄色で彩られた半額シールを着々と貼っている姿が目に入った。

半額神が最後の弁当へシールを貼る。軽く手首と足首を捻る。踵を返して、事務所へ続いているであろう扉へ歩み寄る。二、三度の屈伸。扉を押し開ける。走り出すスタンバイはできた。寂しげな灰色の床が続く奥へと姿が消えていく。いつでも来い。

扉が閉まる。その瞬間、店内の狼たちは雄叫びを上げ、彼らが心底求める半額弁当へと手を伸ばす。今日の夕食を楽しむために。

気づけば、オレと探偵は走り出していた。「さあ、探偵。あんたは今宵何を狙う？」

「さあね。とりあえず、食えるものならいいさ」

まるでマールウのようにニコツと笑った。言うまでもなく、物真似としては似ていない。

棚に近づくと、すぐさま左右から男たちが襲い掛かってくる。スーツ姿のサラリーマンだが、顔立ちはまだ板についていない。

最も接近していた一人の胸倉を掴み、手元に引き寄せると同時に、勢いよく顔面目掛けてストレートを繰り出した。もしかすると歯が折れたかもしれないが、知ったことが。

すぐさまノックアウトしたスーツAに代わり、似たような格好をしたスーツB、Cが徒党を組んで飛び掛り、蹴りと拳を繰り出した。が、スツとそれをかわし、体制の崩れたBを勢いよく背負い投げし、床へと叩きつける。すぐさま、勢いをつけて足を踏みつけた。ゴキッ、と鈍い音が鳴ったが、それはすぐに店内の喧騒に紛れた。

Cは怖気づいたのか、そろそろと後ろに下がった。しかし、運悪

く探偵が後ろで待ち構えており、繰り出した回し蹴りで一発KOで場外送りにされた。

「さあ——名前のねえヤツからかかって来やがれ！」

そう叫んだ途端、挑発に駆られた何人かの狼とも犬とも知れないような荒くれ者たちが向かってくる。

オレは偶然近くに転がされていたカゴを手に、それを電話帳のごとく末端を掴み、乱雑に振り回して引つかかるヤツらを床へと叩きつけていく。

正面から向かってきたバカどもにはこれでいい。が、散開して回り込んできたのにはどうする？

——簡単だ。

その場でバレエを踊るかのごとくカゴを振り回す。どうせ、向こうから寄ってきてくれるのだ。これでも何人かは場外だ。

カゴを適当な狼——サングラスを掛けたの後頭部目掛けて投げつけ、再び徒手格闘に戻る。

襲い掛かる一人を拳でノックダウンさせ、痛みで床に転がり、開いた腹を思い切り蹴飛ばす。銃用なのは一度ではなく、何度か繰り返し、いたぶるように行うことだ。

ある者には顔面ストレート、ある者は背負い投げ、回し蹴りと散々な目に遭いながらも次々に脱落していく。極力、息のないように胃の辺りをかき回すように殴り、蹴りつけてやる。

ふと、寿司が並べられた棚付近に隙間が出来たことに気づき、すかさずそこへ飛び込む。弁当棚を背に逃げ場のない状況に追い込まれるが、それでいい。背水の陣ならなおさら戦いやすい。

合間を見て、寿司コーナーに残った半額パックを垣間見る。狙いは二つ。五貫の『かんぱちにぎり寿司』と『海の恵み（12貫）』。このスーパー限定かどうかは知らないが、寿司の場合1パックだけでは満足できないことも多いため、特例で二つまでの確保が認められている。

寿司に手を伸ばそうとも防戦一方。伸びてきた手を弾き、取ろう

とした手を弾かれる。

決定打に欠けているのだ。そう、確実に勝敗を喫する決定打が。そして、それを失った理由は数年のブランクだと察した。

「情けねえなあ……二つ名持ちだったのに」

苦笑しつつも狼の群集を力チ割るように拳を振るう。瞬間、その隙を見計らって手を伸ばす男が視界の端に映った。

「探偵……!？」

すると、キザッぽくフツ、と微笑を浮かべ、答えた。

「いくらハードだろうとも、優しくとも空腹には耐えられないからね」

これ以上進ませまいと足払いを掛けに急ぐ。が、間に合わない。間に合わないなら、いつそ――。

踵を返し、探偵を追うように保冷機能のついた棚へ向かって駆ける。

守りを、捨てる。

守りを捨て、全身全霊を掛けたうえで弁当を獲りにかかる。

足をがむしゃらに動かす。探偵の背中までもう少し。後ろから他のやつらの奇声が聞こえてくる。が、構うものか。今はただ、走れ――。

足が使いものにならなくなってもいい。ほら、もう少し、もう少しだ。

駆ける。加速する。世界が早く動く。そして――。

どうだ、追いついたぞ――。

探偵の右真後ろにまで迫ったオレは右肩に向かって勢いよく左腕を伸ばし、しっかりとそこを掴んだ。そして、そこを起点として力タパルトにするかのごとく、さらに加速した。

探偵のうわっ、という短い悲鳴が聞こえる。駆け寄った棚にはいくつかの寿司パックが見え、それらの二つに向かっておもむるに手を伸ばした。

レジで会計を済まし、意気揚々と口笛で往年の刑事ドラマのエンディング・テーマを吹き鳴らしながら店を後にする。左手に握られた一枚五円で買ったビニール袋の中には戦利品の寿司、二パックが収まっている。

「やあ、さつきはどうも」

探偵が緑のセロハン・テープの貼られた正方形のパックと割り箸、それと半額シールの貼られた二個のおにぎり片手に隣に並ぶ。さつき転んだときに打ったのだろうか、空いた左手はしきりに後頭部を擦っている。

あの後、今日の夕食を得ることができたオレに続いて、探偵もまた寿司を手に入れることができたらしく、少し遅れてレジに並んでいた。

「『Heart is Gold』か……悪くない」

「それ、いいのか悪いのかどっちなんだよ」

探偵はふむ、と顎に軽く左手を添えてつぶやく。

「悪くない指摘だ」

スーパーから少し離れた位置に公園があり、その日半額弁当を手にした狼のおおよそはその敷地内のベンチにでも腰掛けてその日の夕餉を楽しむ。

とりあえず、適当に目に付いたベンチに腰掛けると、それに習うように探偵も隣へ腰を下ろした。

「それじゃあ、夕餉ゆうぐけにしよう」

割り箸の封を切り、どちらともなく「いただきます」と手を合わせる。

「なあ、探偵——」

ふいに問いを投げかける。

「お前は何を獲ってきたんだ？」

これだよ、と探偵は正方形のパックを見せた。ラベルには『海鮮づけ丼』と書かれており、原価は398円。

「そつちは何を買ったんだ？」逆に探偵が訊ねてきた。

答える前に思わず頬が緩んでしまうが、それを何とかこらえて二つの寿司の入ったパックをビニール袋から出した。

途端、探偵は言葉を失い、ゴクリと生唾を飲み込んでから、ようやく口を開いた。

「『かんぱちにぎり寿司』に……『海の恵み（12貫）』……!？」その言葉にオレはニヤリと笑う。

「そう、人気が高いからなこの二つは。特に——」

ちらと『海の恵み（12貫）』へと視線を移す。「こいつは早々残らない」

「それはともかくとして、だ。早く食べようぜ。もう腹ペコでさ」そして、改めて手を合わせた後、『かんぱちにぎり寿司』、『580円』と記載されたパックを開けて中の五貫の寿司と対面する。

桃色のような赤みがかったかんぱちの下に、回る寿司では決して出ないような寿司ネタと同じぐらい大柄な銀シャリが待ち構えていた。そう、回る寿司と異なり、ネタとシャリは大柄で、どこか贅沢さを感じさせた。

美女が誘っている。思わず、そんな錯覚に襲われる。思わず箸を取り、豪快に一貫を一口で食す。

一口噛み締めた途端、まろやかなかんぱちの味が広がる。が、それを引き締めるように酢飯が味覚を整える。

うまい。思わず、バイト初日を思い出した。不安を覚えながら、弁当を片付ける最中、食品のおばちゃんからこつそりと食べるように薦められ、口にしたのがこれだった。そのときは醤油がなかった。今回も醤油は掛けずに食す。

素材の味が十分なため、そのままでもうまい。

箸を置き、空になったトレーをぼんやりと見つめ、思わず頬を緩ませる。

「ありがとよ……こつそさん」

手を合わし、半額寿司に感謝した。

「早いな……」

「さっき言わなかったか？」残るもう一パックへと手を伸ばす。「オレは腹ペコなんだ」

そう言つて改めて箸を取り、パッケージに貼られた誇らしく黄金に輝く『中トロ』のシールを見る。このシールこそが、この弁当が普通の寿司ではない証である。言うなれば、寿司の『月桂冠』。その証明がこれなのだ。

その神々しいパックを静かに開けた。

中トロ、かんぱち、赤身、ホタテの順で縦に並べられ、同じものが横に三つずつ鎮座している。あろうことが、ホタテにはイクラが三つ乗せられ、高級感を演出していた。

まずはホタテに手をつけ、口に運ぶ。独特の歯ごたえとともにホタテの味が広がる。

前座らしく、あまり主張しない。が、最後の一つに刺身溜まりを掛けていただく。途端、お澄ましの顔から凶暴な顔に変わる。味もそれに習い、前座に惜しいものになった。

続けて、赤身へ。相変わらず、銀シャリと刺身の厚み、大きさが半端じゃない。回る寿司では到底口にできないであろうそれを口に入れる。脂の乗った赤身が舌の上を走る。思わず、夢見心地な気分になるが、適度に酢が利かされた寿司飯が意識を現実に戻す。言うまでもなく、味は申し分なかった。

赤身でこれなら、中トロではどうなるのか……期待が膨らみ、思わず中トロに箸が伸びてしまうものの、それを咎め、かんぱちに箸を向ける。

やはり、大きい。回転寿司なら、これより一回り小さいものしか出さないだろう。そうでなければ、採算が合わない。

一口で頬張り、味わうように目を閉じる。

頬の裏側でかんぱちの膨大な脂が溢れ出す。そして、舌を整える銀シャリ。完璧なコンビネーション。

刺身を付いていた醤油に浸せば、かんぱちのまろやかさに磨きがか

かり、さらに旨味が増す。

そのままでも、醤油を掛けてもうまい。それがかんぱちだった。そして、最後の肴、メインディッシュの中トロ三貫が残された。中トロも赤身やかんぱちのサイズも百円で見慣れた者としては桁違いに大きかった。だが、この中トロはどうだ。パツと見、他の寿司とサイズは変わらない。が、中トロでそのサイズなのだ。

思わず、生唾を飲み込む。そして、震える箸の先で中トロを掴み、ゆつくりと、しかし一思いに口の中へと放り込んだ。

あっさりとした味、飽きを感じさせないコク……。

思わず、刺身を醤油に浸け、ご飯の上に乗せて再び咀嚼する。

瞬間、なぜ中トロがあっさりとした味なのかを理解する。なぜなら、醤油と組み合わせたその時に、中トロは本来の牙を剥き出しにするからだ。

あっさりとした素材の味、控えめなコク——それらは醤油と溶け合い、美味のハーモニーを奏でるために用意された必然だったに違いない。

「うまい——！」

思わず、シンプルな一言が口から飛び出る。さすが、寿司の月桂冠とも呼べる『海の恵み（12貫）』——原価千円、半額でも五百円と貧乏人には手が出せない強気な価格の理由はこの豪華な寿司ネタ、銀シャリ、そして味にあったのだと初めて理解した。

その後、箸を置いたオレはフツと微笑を携え、ポツリとつぶやいた。

「こんな高い弁当が食えるオレは——ホント、幸せもんだな」

「まったく、その通りだろうね。ところで——」

隣で黙々と租借していた探偵がちらりとオレのバックに目をやる。視線の先には後の楽しみと思っただけで残して置いたかんぱちが一貫残っていた。

「……何だよ」

「それとこれ、少し交換しないか。いや、ここしばらく懐が寂しく

てね。かんぱちすらほとんど口にしてないんだ……」

探偵がそうしたように、ちらりと探偵の手にある『海鮮づけ丼』を見る。醤油ダレと混ぜ合わせたらしい酢飯とブツ切りにされた赤身の刺身が乗っていて見るからにうまそうだった。

「わかった……じゃ、こんだけもらうからな」

と、有無を言わずづけ丼のご飯と赤身を大きく抉り取り、それをパックの上へと載せる。探偵があっ、と声を上げたが、渋々了承したらしく、半ば残念そうな表情を浮かべながらかんぱちを口へと運んでいった。

づけ丼を口へ放り込んだ途端、どこかで一度食べたことのあるような錯覚に陥る。確か、何だったっけ――？

「たぶん、手こね寿司じゃないかな。特に三重県志摩地方辺りの」
ああ、きつとそうだ。

いつ、どこでどうしてそれを食べたのかはあまり覚えていないが、ただ一言うまいということだけは昔も今も変わらない。

箸を置き、パックの中に割り箸を放り込んだ後、ごちそうさま、と手を合わせて今夜の夕餉は終わりを告げる。幸福な満足感の余韻と、膨れた腹を残して。

「おや、今夜は月が赤い――」

ふと、探偵が空を見上げてそうこぼす。見れば確かに月は赤かった。

どこことなく、探偵が言いたいことがわかり、オレはフツ、と笑う。

「確かオレに二つ名がついた夜も、こんな月だったな……」

「みんな忘れやしないさ。それどころか、新しく混じってきたのだってその名を知っているくらいだからね――」

そこで一旦言葉を切り、探偵の視線は月からオレに注がれる。そのまま、どこか懐かしむように探偵は言った。

「……『烈火の月』」

オレは口元を吊り上げてニヤリと笑った。

赤い月是不吉な前兆だと昔からよく言われることだ。だが、赤い月を意味するであろうその二つ名を付けた者は、おそらく別のものを連想していたのではないだろうか。

ここに『烈火の月』という小説作品がある。

主人公は『笑いながら人を殴る天才』と呼ばれる刑事で、事件解決のためなら暴力を辞さない凶暴な男だった。もしやすると、その凶暴さを彼女の中に感じ取ったのかもしれない。

圧倒的な強さと凶暴さ。まさにそれは『烈火の月』の主人公、我妻諒介に通じるものがあつた。

そして、今夜と同じように気持ち悪いほど赤く見える月が爛々と輝いていたその日、空に浮かぶ怒りを溜め込んだように、焼けたように夜空に映える赤い月と、彼女の強さと凶暴性、暴力性にあてがって二つ名を付けられた。

『烈火の月』——相模東はそんなことを思い出しながら、『A s Time Goes By』を口ずさんで帰路に着いた。駅まではまだ少しあり、ふと、夜空を見上げる。

月は烈火のごとく赤く染まり、一人の『狼』の帰還を静かに祝福していた。

番狂わせ 海の恵み（12貫）1000円（後書き）

どうも、ハインケルです。

今回、後編となります。前編のあとがきで書きましたが、前後編混ぜて『11114文字』という末恐ろしい数値を叩きだしたので、急遽前後編に仕立て直しました。

で、後編……。

作中に二度、半額弁当レビューらしきものが登場しますが、この二つの寿司、実在します。

というか、自分が食しながら携帯片手にせっせこ打ってました。特に、『海の恵み（12貫）』に関しては食べ終わるまで一時間を要するほど時間を掛けました（↑要はアホですね！

俗に言う、リアル・半額弁当であり、リアル・ベントーレビュー（笑）

そうそう、バイト初日にパートのおばちゃんから食いな、と薦められたのが『かんぱちにぎり寿司』でした。今でも時折、買って帰って食べます。もちろん、醤油はかけずにそのままいただきます。

また、二つ名『烈火の月』の由来は野沢尚先生著の同名の小説です。自分が小説を書く際の教本としているほどの私的神作で、自分が読んだ中でもっとも没頭した作品です。

ついでに、本作のタイトルである『MOON IN A FURY』もその辺りから来ています。単行本か文庫本を持っていれば、すぐに由来がわかります。

思えば、東のキャラクターは『烈火の月』の“我妻諒介”から多大なる影響を受けているのかもしれませんが。破天荒で……（ry
蛇足として、この『烈火の月』は北野武初監督作品『その男、凶暴につき』の脚本を担当した著者が自分の書いた脚本を勝手に削られたことに腹を立て、自分のやりたかったことを小説で表現したものです。

なので、同映画を見た人は初め、我妻「武でどうしても見てしまいますが、徐々にこれは武ではない、と思ってきました。

それほどに、どこか別人でまたそれがいいんです。アクションや銃撃戦もあるし。

正直、暴力警官ものなら最近発表された『アウトバーン』よりも『烈火の月』のほうが数百倍優れているのではないかと私的に勝手に思います。

次回からはまた本編へ戻ります。俗に言うシリアス・モードです（笑） んでもって、三人称に戻ります。

今回の一人称の理由？ チャンドラーの『長いお別れ』を読んでいる最中だからだよ！（謎

あと探偵。アレは『ハードボイルド・エッグ』の主人公、最上俊平が元ネタです。気になった人は読んでみてください（笑）

そろそろ本家のキャラと絡ませないとまずいかな、と思いつつもまだ書き始めてすらいないので、次の更新はいつになるかは不明です。

感想やら評価をプリーズ、とつけるのも最近慣れてきました。やっぱり、自分の文体は読みづらく、受け入れられないのでしょうか。あるいは、それこそ自分には物書きとしてのセンスは微塵もなく、

話もおもしろくなくて下手くそだから口々に読まれないとか……あ
りうる（苦笑）

では、またいつかお会いしましょう。

四月下旬。都内某所に位置する鉄砲店の店内で、ほお杖をついた店主がフーツと一つため息を漏らした。椅子に腰掛け、煙草の紫煙をただ目で追い、その行く先をぼんやりと見つめている。

頭にバンダナを巻き、口にピース・ライトボックスをくわえた女、佐藤由佳は鉄砲店『ビパップ』の二代目店主である。が、ここ数十年の間に施行された更なる銃規制の影響で射撃競技に励む人数が減ったことにより、ただでさえ少ない顧客が減少したため、商売がつつたりの有り様だ。

火の車となった店の経営を続けるべく奔走した結果、病に倒れた先代店主、もとい父親とは数年前に死別。その際に自動的に？？というより、元々から射撃競技に励んでおり、扱いにもこなれた由佳が店を受け継ぐ形となった。本音を言えば、父親との思い出をほんの少しでも忘れたくなかったからだ、と自覚している。この小さな店で、由佳は初めて銃器に触れたのはもちろんのこと、競技に挑むために初めての愛銃を選んだのもここだった。

今日も客はなし。そう思い、くわえていた煙草を灰皿へと押し付けて店先のシャッターを閉めようと立ち上がった途端、ミリタリ・ジャケットを羽織り、フードを深々と被ったどこか怪しげな客がいつの間にか店の軒先に佇んで、強化ガラスで仕切られたショー・ケースを覗き込んでいることに気づいた。背丈からして男だろうか。何にせよ、十二分に怪しい。

念のため、護身用として手元に置いていたハイスタンダード・K-1200ライアットモデルを携えた後、入り口のガラス戸を開け、客らしき人物に声をかける。「何かお探しかい？」

すると、相手はフードの裾を少しめくって、こちらへ顔を見せる。その顔は随分と見慣れたもので、由佳はすぐさま中に入ることを薦めてから店内に戻る際、すばやくガラス戸に提げられた木札を『C

LOSE』に裏返した。

扉を閉めた由佳はカウンターのの中に戻り、フードの客と対峙する。

「贈り物の感想は？」

「悪くないな。何しろ、弾頭に証拠が残らない——今後使う機会がありそうだ……」

そう言つて、人相を覆っていたフードを脱いだ。途端、ポニーテールに結わえた艶やかな黒髪が露わになり、凜とした二つの目が由佳を見つめた。

「じゃあ、注文内容を詳しく聞こうじゃあないか。ようやくこっちも暇になつてきたから——」

由佳はちらと視線を壁際に積まれたガンケースの山に目をやった。おそらく、中には密輸された銃器が“使える具合にまで整備されて”納まっているのだろう。

由佳の代になつてから、こうしたアンダーグラウンドな人種との付き合いは始まった。そうでもしなければすぐに店は潰れてしまうほど、追い込まれていた。

顧客は様々だが、主に暴力団が実用品として用いるべく、由佳に調整を依頼しに来る。そこまで価格を吊り上げない、一応の“適正価格”であるためか、無理矢理拉致された後に風俗へ流され、大小さまざまなものをくわえるはめには至っていない。

「……オーダーとしては、まずサプレッサーの装着は必須だな」

ふむふむ、と由佳はメモを取り始める。「取り外しはできたほうがいい？」

「いや、減音効果重視で固定でも構わない。どうせ発射弾数はそれほど多くならないだろう——それと、発射された弾丸から足が割れづらいこと。一撃で相手を葬ることが可能な口径、それと、できれば隠し持てるような小ぶりなサイズ……」

それから、しばらく由佳はうなり声を上げていたが、突然顔を上げるとニンマリとした笑みを浮かべた。

「じゃ、付いてきて」

由佳は踵を返すと、店の奥へと消えた。羽織っていたM65・フィールドジャケットを翻し、すぐさまその後を追う。

廊下を進み、由佳が扉を開けるとそこは店の裏手であり、すぐ眼前にやや古ぼけた倉庫が見えていた。扉の辺りにはフォークリフトも停められている。

「ほら、こつち……」

金属の擦れるような音とともに倉庫の扉は引き開けられ、二人ともがその中へ入った。倉庫内はやや薄暗く、天井の半透明なトタン屋根から光が差し込んでいた。

倉庫にはおそらくは銃器や弾薬が詰まっているのであろう、大量のコンテナがほぼ正確に並べられ、まるで山のようになっていた。そのコンテナ通りを抜けた奥には銃器を加工するために用いるNCフライスなどの工作機械がズラリと設置されていた。さしずめ、工房といったところだろう。

電気代が馬鹿にならないような油まみれの機械らを他所に、由佳は少々錆びの浮いた事務机と二脚の事務用椅子へと歩み寄り、二組のうち赤錆の激しいほうへ座ると、ようやく質問に答えた。

「いいのがあるよ。ちょうど東の注文に応えられそうなのがさ……」

と、来た道に戻ってコンテナ通りへ由佳の姿は消えた。掘り出すのに時間がかかったのか、三十分が過ぎてようやく戻ってきた。その際、手には小柄なソフト・ガンケースが握られていた。

ガンケースを机に置き、ジッパーを引き開けながら由佳は言う。

「ボンドアームズ・スネークスレイヤーⅤ。銃身長4・25インチ、口径・45ロング・コルトもとい、410ゲージ散弾。上下二連式で有名なレミントン・ダブルデリンジャーの現代版レプリカ。こいつをベースにすれば、もしかするとできるかもしれない」

そう言っ、スネークスレイヤーⅤを取り出した由佳はそれを東に手渡した。材質は見る限りステンレスで、ぼんやりとした明かりで上下に二つある銃身が鈍く光っていた。また、エンフィールドやウェブリー・リボルバーと同じく、銃身の両サイドが平坦になっ

ているため、どこか六角形を思わせる形状となっている。フロントサイトは大柄だがクイックドロウに最適な三角形形状へと変更され、オリジナルよりもずっと狙いやすい。

「ちゃんとトリガーガードもあるのか……」

試しに撃鉄を起こして引き金を引いた。引き金は材質故か多少粘り気があるように感じられたが、ダブル・アクションよりもやや引き金が軽くなるシングル・アクションの機構と引き代が少ないことも関係してか、チンツ、という軽快な金属音とともに、いともたやすく撃鉄が落ちた。トリガー・プルは許容範囲だろう。

「ストックも大柄で握りやすいし、悪くないと思うんだけど……どうよ？」

と、どこか不安げに由佳が東の顔を覗き込む、東はしばらくじつとその大口径ダブル・デリンジャーを見つめた後、ゆっくりと由佳に向き直った。そして、よく通る声で明快な答えを口にした。

「納期は極力早く頼む……代金は二割——いや、三割り増しだ」

東が店を出た際、すでに午後三時を回っていた。本来ならば日差しが暑いほどに照り付けてくるものの、今日に至ってはあいにくの雨であり、空は夜のようにドス黒かった。

その土砂降りの中を、東はM65・フィールドジャケットのフードを被り、ポケットに両手をつ込んだままで彷徨うように進んでいた。本来なら、直接駅へと向かい、学園島に戻るのだが、由佳から“おつかい”を頼まれたのだ。

——料金滞納してる組があるもんだからさ、ちょいとかつさらってきてもらえる？ タダとは言わないから。

東も初めてではない。もう慣れたもので、いかに騒ぎ立てようが銃弾は狙ったところへ飛ばせる。

事務所が位置していたのは寂れた四階建ての雑居ビルだった。表口からでも易々と入り込めそうなほど人気がない。

だが、念のために路地裏から裏口を捜し、そこから入り込むことにした。隣接する建物の間の路地は薄暗く、ゴミの詰まった袋が辺りに散らばっていた。

それらを踏み越え、扉の前へと忍び寄ると両手にシューティング・グローヴをはめ、ドアノブを回してみる。鍵は掛けられていないのか、手ごたえがあった。

扉を僅かに開き、身体を滑り込ませるようにして中へと入った。そこで小さくため息をつく、東は羽織っていたジャケットのジッパーを開いて左脇の下辺りに吊るしたショルダー・ホルスターに手を伸ばした。ホルスターにはスタームルガー・SR1911が納まっており、ステンレスのマット・シルバーの肌を覗かせ、鈍い輝きを放っている。

腰周りにはベルトと腰の間に数本の予備らしい八連発弾倉が差し込まれ、これから起こるであろう騒ぎを予見しているかのようだった。

SR1911を抜き出した東は遊底に手を掛け、半分ほど後ろに引いた。すでにチャンバーはホットな状態で、撃鉄を落としてやるだけで轟音とともに、45ACPが銃身から飛び出す。

SR1911には腰に差していた純正マガジンと同じものが銃把に納まっていた。薬室の一発を含めて合計九発。オリジナルのコルト・M1911よりも一発多いが、コック・アンド・ロックという携帯方法はニンティーン・イレヴンの血統であればいつだろうと付きまとう。由佳から渡されたSR1911もまた、所詮は星の数ほど存在するガバメント・クローンという氷山の一角に過ぎない。

スペックも、45ACPに5インチのスライド、ノヴァック・サイトを用いた3ダット、という最近ではありふれた現代仕様の1911で、何も目新しいものはない。ただ、由佳が気を利かして念入りに一体型のフィードینگ・ランプ部分を磨き上げたバースト製のカスタム・バレルを組み込んでくれたのはありがたかった。通常のノンランプト・バレルではホロー・ポイント系の実包を用いる場

合、薬室に送り込まれる際に弾頭がフィーディング・ランプ部分で引っかかり、ジャムを引き起こすことも多々あるからだ。

SR1911のセフティを解除し、それをダブル・ハンドで構えると静かに階段を上がっていく。なぜか裏口は二階にあるであろう事務所へと直通しているらしかった。

階段を上りきるとアルミ製の扉が見えた。扉の一部にはめ込まれていた波ガラスの向こうではちらほらと話し声とともにテレビの雑音が流れてくる。わかるはずもないが、侵入者の姿に気づいていない。

東はもう一度スライドを引いて薬室の中の実包を確かめ、深呼吸するとドアノブを回した後、勢いよく扉を蹴破った。

中には八人ほどの組員がおり、何ごとかと口々に罵声を上げていた。みな、武器は所持していない。

その内、頭の禿げ上がった男目掛け、引き金を絞った。轟音とともに男の脳天は吹き飛ばされ、窓ガラスが赤い鮮血で鮮やかに彩られた。

瞬間、悲鳴と絶叫が狭苦しい雑居ビル二階を反響した。ある者は武器を取るべく集められているらしい部屋へと走り、新入りらしい若い少年は机の下に隠れてガタガタと震えている。

が、みな平等に一発——当たり所が悪かった者には二発——のフエダル・ハイドラショック弾を食らわせ、次々に絶命させていった。

二本目の予備弾倉に手をつけたとき、再び静寂が舞い戻ってきた。外で降り注ぐ雨はさらに激しくなり、テレビからは淡々とニュースを読み上げるアナウンサーの声が延々と流れ続けていた。

バケツ一杯以上もの血が流れ出たであろうその部屋に、未だ東はいた。血塗られた窓ガラスを背にし、灰色のデスクへ東は腰を下ろしていた。口元に火の点いたピースをくわえられている。

紫煙がゆらゆらと上がり、東は右膝を抱きかかえるようにして顔を俯かせたまま、瞼を閉じた。煙草とライターは開幕早々、華々し

く散った男の懷から拝借した。

ふと、扉の開く音がした。すぐさま顔を上げ、声を上げる間もなく上から降りてきたらしい男の顔面に目掛けてダブルハンドで狙いをつけ、手首をやや強めの反動が襲い、真鍮色の空薬莖が宙を舞った。ほとんど灰になりかけた煙草を床へ吐き捨てるのと男が崩れ落ちる瞬間は、ほぼ同時だった。

顔をマツシユルーミングしたハイドラ・ショック弾頭でグシャグシャに碎かれ、人相すらわからなくなった屍は床へ崩れる最中に扉へ手を掛けたことによつて、再び扉は閉じられた。それを見届けた後、悠々と新しい煙草に火を点け、ゆっくりとそれを味わう。

しかし、火を点けてからものの五分も経たないうちに、階段を駆け下りるような足音が響いてきた。おおよそ五人ほどだろう。足音はさらに近づいてくる。

東は最初に撃ち殺した男たちの一人が駆け寄ろうとしていた武器庫へ入ると、無造作に目に入った30インチ銃身のリブのない散弾銃を手にした。続けてレシーバーの刻印をヒントに12番のダブルオー・バック散弾が入った弾箱を床にぶちまけ、拾い上げた端から次々に銃身下に設けられたチューブラー・マガジンへシエルを押し込んでいく。

最後に薬室へ直接ショット・シエルを放り込んだ後、フォアエンドを戻して支度を済ませた。入り切らなかつた分はジャケットの懷にねじ込んだ。

東は男が出てきた扉のすぐ隣でポンプ・アクション式の散弾銃――ウインチェスター・M12を構え、武装しているであろう五人の到着を待った。

そして、扉が勢いよく開くと同時に東は死角から飛び出し、12番径の銃口を向けた。銃身が長いいため、少々出遅れたものの、ふいを突かれた相手はさらに対応が遅れていた。

引き金を引いた瞬間、激しいマズルフラッシュが瞬いたかと思えば、腹に響くような重い反動が東の右肩を襲った。

が、激しい閃光とともに吐き出されたバック・ショット弾はヤクの一人をフツ飛ばし、その身体は血肉を撒き散らしながら宙を舞った。

フォアエンドを操作し、空になったシエルをエジクトして後に続いていた男たち目掛けて腰だめで速射する。次々に撃ち出された九粒弾が、階段で一列に並んでいた四人を襲った。反撃する間はないかった。

悲鳴を上げ、血とはらわたをさらけ出しながら踊った末に、体勢を崩した身体は階段から転げ落ちる。一人が持っていたミニウーザーが痙攣した指先に導かれるままに天井目掛けて火を吹き、けたたましく熱い薬莢をバラ撒いた。

東は空になったチューブ式弾倉へ撃ち終えた五発分を再装填し、ゆっくりと階段を上がっていく。辺りは死と硝煙の匂いで充満していた。

踊り場で壁にもたれかかる男が東の姿を見るなり、持っていたスプリングフィールド・M1911A1の銃口を向け、引き金を引いた。が、撃鉄はむなしく空を切った。扱い方を知らなかったのか、薬室は空だったらしい。また、耳にピアスをしたその男の右足は散弾で無残にも砕かれていた。

東はウィンチェスターを左手でダランと下げ、空いた右手で左脇下のSR1911を取り出し、男の頭を撃ち抜いた。

踊り場が血でヌルヌルと滑りやすくなるより先に東は階段を駆け上がった。三階も二階と似たような間取りだったが、人の気配はせず、無人だった。

四階におそらく金庫があるはずであるが、同時に待ち伏せている可能性も高かった。試しに、扉を軽くノックして階段を五段ほど降りて身を屈めると、何の前触れもなく爆発音のような銃声とともに扉が散弾でブチ抜かれた。

「どこの組のもんかは知らんが、勝手に儂の事務所へ上がり込みおつて！ 生きて帰れると思うな、この無礼者め！」

おそらくは組の頭であろう。その濁った罵声に続いてさらに散弾をぶつ放してきた。下手には動けない。動けばいい力モになる。

が、二発目の散弾を撃ち出した後、すぐに散弾は飛んでこなかった。おそろおそろ顔を上げて引き戸のない枠越しに様子を伺うと、着物に袴姿をした白髪の老人が手にしていたのはベンチレーテッドリブ付き30インチ銃身を備えた国産の上下二連式散弾銃、ミロク・SP-120だった。上下二連式散弾銃はその名の通り、単発式の銃身を上下に二本備えている“だけ”であるため、装弾数は二発と少ない。

それに加え、同じように二つの銃身を備えた水平二連式よりも排莢する際、エジェクターを動かすのに必要な銃身を折る角度が大きいため、すばやい装填には適さないという欠点がある。事実、少々まごついているらしく、すぐに散弾は飛んでこなかった。

ウィンチェスターを静かにリノリウムの床の上へ置き、階段から鼻より上を突き出すような形でSR1911を構える。まだ再装填には手こずっているようで、東が銃口を向けていることに気づいていない。

東が引き金に圧力をかけ、組長の両足目掛けて速射したのはちょうどミロク散弾銃への再装填を終え、中折れさせた銃身を戻した時だった。すばやい二連射から繰り出された・45口径弾の威力はさまざま、体重を支える両足を失った老人は悲鳴を上げて仰け反りながら倒れた。

安堵のため息をつき、身体を起こした東は悠々とその部屋に入った。価値はよくわからないが様々な装飾品が置かれ、いかにも金を持て余していることを暗示していた。

その中に黒く、大柄な金庫が鎮座していた。ダイヤル式だが、暗証番号を知っているのはおおよそ一人だけだろう。

濁った声で息も絶え絶えに恨み節を繰り返す老人のSP-120を手の届かないところへ寄せたあと、東はその白髪を思い切り掴み上げ、二、三度頬を殴った。

「佐藤由佳の使いだ……とつとと金庫開ける。まだ代金を頂いてないんでね」

「なあ……頼む、医者……医者を早く……」

「それより先に金庫だッ」

東の剣幕に押され、老人はガタガタ震えながら金庫に歩み寄った。両足は使い物にならないため、匍匐前進のごとく這って近寄り、生き別れの肉親との再会を喜ぶかのように金庫にしがみついた。

「なあ……金はやる……だから、医者を……」

「ああ、わかったから早く金庫開けてくれよ」

老人が震える手でダイヤルを回していく姿を東はニヤニヤとした笑みを浮かべたまま、その無様な姿を蔑むように見下ろしていた。ふと、部屋の隅々までをぐるりと見渡すと、二挺ほど金色にエングレーヴが彫り込まれたうえで金めっきが施されたコルト・M1911とブローニング・ハイパワーがそれぞれ一挺ずつ額に入れられて飾られているのを見つけた。どこで手に入れたのかは知らないが、やはり金持ちの趣味は理解に苦しむ、と内心毒づく。

「開いたぞ——」

金庫の中には一万円札の束がいくつも積み上げられ、一生の半分程度ならば遊んで暮らせそうなほどの量に見えた。

「さあ、早く医者——」

老人が振り返ったとき、すでに銃靶が閃いて顔へと振り下ろされた。骨が折れるような鈍い音とともに鼻から間欠泉のように血が噴き出た。

顔を抑えてうずくまったところへ、顔面を思い切り蹴飛ばしたうえで拳銃を三発盲射して、ようやく眼前の白髪組頭は動かなくなった。脈がないのを確かめた東は長椅子に掛けられていた上着を風呂敷代わりにして悠々と帰り支度を始めた。

札束の多くは拝借した上着に包み、入りきらない分に関しては羽織っていた上着のポケットへとねじ込んだ。思っていたほど多くはなかったが、五百万はあるだろう。

最後の札束をポケットに差し入れた際、入り口から驚愕したような声がした。振り返ると、そこに立っていたのは十七前後のあどけなさを残した少年だった。トイレにでも隠れていたのだろうか、組長の哀れな姿を見て唇をかみ締めるようにしてわなわなと震えている。目には恐怖の色がにじんでいた。

途端、何を思ったか少年は踵を返すと勢いよく階段を駆け下り始めた。東は上着に包まれた札束の山を掴んで、同じように階段を駆け下り、その残影を追った。

見られたからには、殺す必要がある。下手に証拠は残したくない。SR1911の銃把に最後の予備弾倉を叩き込みながら、東は血の匂いで充満したビル内を駆け抜けた。

階段を一階まで駆け下りると、ちょうど少年が正面玄関から外へと抜け出したところだった。日が暮れてもなお、雨がやむ様子は一向にない。

「こ、殺される——！」

言い終わるより先に、東の拳銃が火を吹いた。鉄パイプで脇腹を思い切り殴られたような衝撃とともに少年の身体は吹き飛び、雨の滴るアスファルトへと叩きつけられた。

すぐさま側へと駆け寄り、その身体目掛けて四度引き金を絞った。引き金を絞るたびに、すでに動かなくなった身体の肉片と血が跳ね、雨水に溶けていった。吐き出された熱い薬莢はジュツ、と焦げるような音を立てて冷やされる。

通行人の悲鳴が聞こえ、遠くからサイレンの音が聞こえる。目的は達成し、潮時だと悟った東はフードを被り直して、豪雨の闇へ向かって走り去り、瞬く間にその姿は見えなくなった。

LET 60-0 (後書き)

お久しぶりです。ハインケルです。前回の番外編はさておいてシリ阿斯・モードに回帰してきました(笑)

さて、今回ようやくアクションシーンが出ました！ やったね、たえちゃ(ry

ま、フタを開けてみれば仁義と容赦のない大藪春彦作品によくありそうな大虐殺なわけですが(笑)

それでも、こんなことがやれちゃうのはひとえに、東が武偵であって武偵ではない、ということに尽きます。

そして、スネークスレイヤーⅤの登場です。これは自分が散弾銃用サプレッサーを調べたり、大口径デリンジャー系列を調べて出てきた副産物になります(笑)

とりあえず、ヒントは『リベレーター』と『ハッシュパワー』です。実に不親切なヒントではありますが……(笑)

あと念入りに書いておくと、“これが元より考えていた相模東というキャラクターです”。作者がトチ狂ったわけじゃありません。念のため。

感想および評価プリーズ！

では、また。あと、何か思い出したら後書きは追記したり、編集したりします(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3369u/>

THE MOON IN A FURY.

2011年11月17日03時20分発行